



**KYOTO
DESIGN
CONFERENCE
1992**

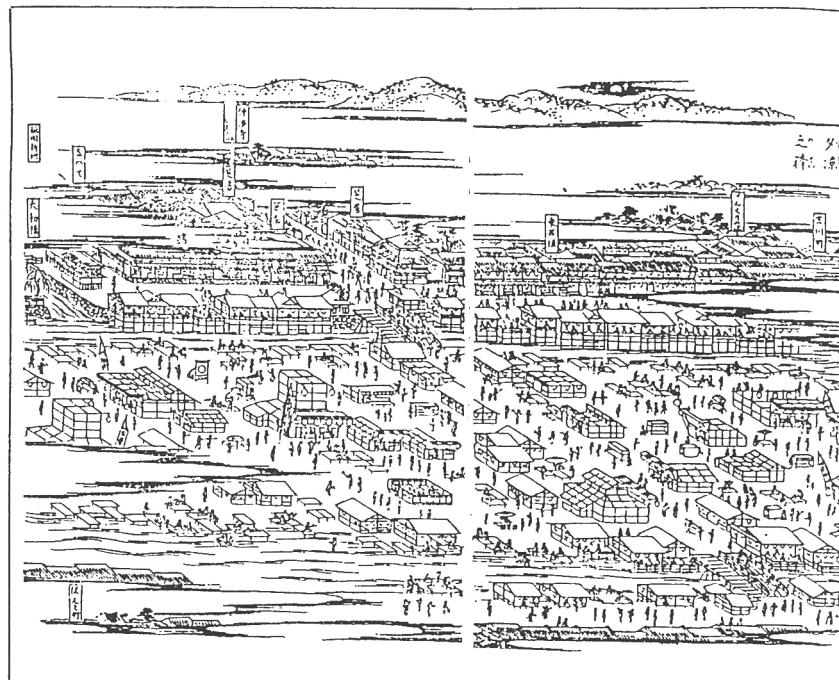
第12回京都デザイン会議

会議録

新・建都の
デザインを考える

KYOTO美觀醜觀論

第12回京都デザイン会議 京都美観醸観論



四条河原の夕涼み

主 催 京都デザイン関連団体協議会（京デ協）
運 営 第十二回京都デザイン会議実行委員会

構成団体

社団法人日本図案家協会（日図）
京都服飾デザイナー協会（KDK）

社団法人日本デザイン文化協会京都支部（NDK）
京都伝統産業青年会（KDS）

京都インテリア産業協会（KIS）

社団法人京都デザイン協会（KDA）

協同組合京都クラフトセンター（KCC）

京都建築設計監理協会（KSK）

社団法人日本グラフィックデザイナー協会京都地区（JAGDA）

社団法人京都国際工芸センター（ICC）

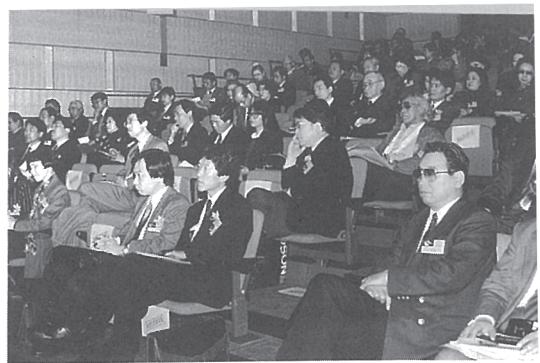
社団法人京都府造園建設業協会（造園）

社団法人新日本建築家協会近畿支部京都部会（JIA）

目次

ご挨拶 議長 三輪泰司

特別講演 情報快楽都市 高田公理 愛知学泉大学教授



パネルディスカッショーン

第一分科会 鳴川と町並みの裏側で

■チューター 真鍋宗平

■パネリスト 尹 孝鎮・神谷雅子・南澤 弘

第二分科会 看板は文化のバロメーター

■チューター 奈良磐雄

■パネリスト 佐竹和男・三野廣史・恩地 悅

第三分科会 公共デザインを新建都の顔に

■チューター 道家駿太郎

■パネリスト 藤本英子・清水泰博・土井 勉・平岡隆一

第四分科会 ときめきのない京の繁華街

■チューター 嶋 高宏

■パネリスト 辻 寿々代・沢田 正・稻田 實・大和文昭

第五分科会 美しい町並みは幻想なのか

■チューター 大倉達也

■パネリスト 山崎正史・脇田周輔・黒竹節人・沢井敬子

第十二回京都デザイン会議御参加の皆様

45

38

33

27

21

14

4

3

いよいよ余すところ八〇〇日を切った平安建都一二〇〇年から、二一世紀を展望して、「デザイン都市・京都」への波動はここから始まります。基調講演「情報快楽都市」で高田公理氏が指摘されたが、現代京都の景観問題が、日本と世界から関心を集めているのは結構ですが、コストティックの対象としてのみ議論されていた段階から、時代を創り、リードするデザインへステップ・アップする時にきたと思います。

デザインは、確かに時代のライフスタイルとその上にできる価値観の産物であり、情報そのものであります。工業生産の手段、あるいは従属性から、デザインそのものに情報としての価値が認められる時代です。そのため、近代都市とは、あるいは近代を支えた産業とは何かを直視する機会を提起して頂きました。

ITF国際コンペ・京都も第三回となりました。新しい京都ブランドは、世界と日本中の期待するところとなりつつあります。デザイン・センター構想も浮上してきました。

日本の・京都的ライフスタイルをデザイン的にリードする時です。今回、中部デザイン協議会の皆さんをお迎えし、交流を深め、日本と京都を広く厳しく見る機会を提供して頂きました。この輪をさらに拡げたいと思います。

デザイン団体は、相変わらずハンギリーです。ハンギリーをバネに、といえばきれいですが、企画・実行委員会の皆さんには、ご苦労をおかけしました。コンピューター・グラフィックによる街のシミュレーションは、インパクトがありました。議論がビジュアルに展開されました。京の春を彩るデザイン会議を、デザイン・クリエーターらしく「フェアー」と一緒にやれたらと思います。

おわりになりましたが、ご協賛・ご後援を頂いた皆様に、心より感謝申し上げます。



情報快楽都市

高田公理（愛知学泉大学教授）

ご紹介頂きました高田でございます。デザイナーのこういうお集まりとしては非常に早い時期からやつておられる、伝統あるデザイン会議でお話をさせて頂くことに多少緊張しております。

ご紹介頂きましたとおり、私は京都生まれ、京都育ちですが、京都におりました時は家業の鶏のひよこのセールスをしたり、工務店に勤めたり、あるいは酒場を経営したり、会社員をしたりということを過ごしておりました。たまたま縁があり、ちょうど一〇年前、愛知県にあります愛知学泉大学に招ばれまして学校の教員になりましたが、ご承知のとおり愛知県というものは京都とは随分違いました、様々なカルチャーショックを受けました。一〇年そういう世界を眺めてきて、改めて京都という都市の持つ意味、あるいはその面白さが僕自身多少わかつてきたような気がしております。

こうした美意識の変化の中での京都の街においても景観を巡る論争が巻き起こっていると考えられないでしょうか。そして、行政あるいは京都の大企業は京都の街の新しい展開にふさわしいビルを建てようというわけです。ところが歴史的に考えてみると、超高層建築がこれから二一世紀にかけても本当に先進的な意味をもつのかどうか。というのも、超高層建築は一九二〇年代から三〇年代、アメリカが最も進んだ工業国として発展していた時期の記念碑としてでき上がってきた

本日のテーマは「京都美観醜観論」ということで、皆さん方、醜さを通して美しさということを考えていこうとしておられるようです。実は私自

デザインと「スマテイック

身も先程ご紹介頂きました『情報快楽都市』という書物の第一章で、「近代工業遺跡」、もはや使われなくなった例えば溶鉱炉であるとか、あるいは石炭をほじくり返した後に残った長崎の軍艦島という廃墟、そういうふうなものが現代という時代において新たな美しさを帯び始めているんじやないかということを書いております。皆さん方もそういう廃墟になつた工場や溶鉱炉、あるいは軍艦島などに対面されがあれば、恐らくその中に現代の社会では失われてしまつたある種の力強さとか美しさというものを発見されることになるのでは、と思います。

おいても景観を巡る論争が巻き起こっていると考えられないでしょうか。そして、行政あるいは京都の大企業は京都の街の新しい展開にふさわしいビルを建てようというわけです。ところが歴史的に考えてみると、超高層建築がこれから二一世紀にかけても本当に先進的な意味をもつのかどうか。というのも、超高層建築は一九二〇年代から三〇年代、アメリカが最も進んだ工業国として発展していた時期の記念碑としてでき上がつてきた



もので、そういうものが本当に未来的であるのかどうか、これは大変難しいところだという感じがします。他方、都市、特に京都の都市にそういう超高層建築を一切建ててはいけないという考え方も、本当にそういうことが言えるのかどうか難しいところにきてるよう思います。デザインといふのは、これは皆さん方の前で私が言うまでもないことですが、何かある意味、ある「徴」、そういうものを表に現わすために行なわれる営みです。「デイン」というのは外に出すという意味であり、「サイン」というのは徴や意味であつたりするわけで、それがデザインという言葉で言われる。

それに対して、例えば「コスマティック」という言葉がある。これは特に何かの意味、徴、コンセプトがあつて飾り立てるのではなく、きれいにお化粧すればいいだらうというときに使われる言葉です。そういう意味では、現在の京都における開発が保存か、あるいは超高層を建てるべきか中低層のビルでおさめておくべきか。とりわけ京都駅、あるいは京都ホテルを巡つてそういう議論が行なわれているのは、デザインの問題として考えるのではなくて、コスマティックの問題としての議論の対象になつていて。という意味では、議論のレベルとしてあまり高くない。超高層を建ててようとする行政、あるいは大企業、それに反対する様々な市民であるとか、市民団体、宗教団体が同じレベルで議論を闘わしている。それはもう少し高い位置に高めていくことができるんじやないでしょうか。一言でいうと、コスマティックからデザインへ。デザインとして都市の問題をどう考

えるかにつながっていく。その際に大事なことは、デザインというは何がしかの意味、あるいはコンセプトを表面に主張する、そういう試みがあるという点です。そうすると、その前に、一体、都市というのは何なのか、あるいは未来都市というのはいかなるものなのか、今後望ましい都市というのはどうのようなイメージを持つべきなのか。それを正確に捉えることなしに、現代にふさわしい都市のデザインを考えることもまた不可能なんじやないでしょうか。

物から事へ、「生活美学」へ

また現代人が直面しているいくつかの変化を捉えなおしておくる必要がある。今、人びとは物よりも事、時間があれば旅に行きたい、時には眩暈の快感を感じたい、と考え始めています。一体これはどういうことなんでしょう。恐らくそれは現代の日本社会が見事に高度に発達した本格的な情報産業社会を迎えた結果ではないかと思ひます。普通、情報産業社会において情報というと、あまり面白くもない、しんどいことだという印象をよびおこしがちです。じつさい情報というと、まず連想されるのはコンピュータです。あるいは電話、それに世の中に大量に流通するマスコミ情報、そして情報化が進行する世の中の動きから落ちこぼれたらえらいことになるぞという強迫が必ずついで回る。その結果、コンピュータとつき合つているとテクノストレスを受けたりするわけです。そういう意味で言つと、現在使われているような情



報、我々の一般的イメージの中にある情報、これは決して面白い情報ではありません。ただ、これは役に立つ。コンピュータを導入しますと生産や流通が合理化できます。こういう情報化のことを今仮に、「メッセージ型の情報」という言葉で呼んでおきます。

そのうえで、ちょっと人間の欲望がどういう方向に進歩発展していくのかを、戦後の日本の世相の移り変わりの中に眺めてみたいと思います。昭和二〇年に戦争が終わりました。私自身は昭和一九年生まれなので戦後派でも戦前派でもなく、戦時中腹の中にいたというので「戦腹中派」と言うそうですが、からうじて昭和二〇年代のことを覚えております。昭和二〇年代の日本人は何を欲しがつたか。何でもいい腹の足しになるものだつたら食べたい。むし芋でもいい、すいとんでもいい、おいしくなくてもいい、腹の足しになるものが欲しい、というのが昭和二〇年代の日本人の欲望の焦点でありました。そこで都市の焼跡に闇市がたつた。そこに人々が集まつたわけです。

それが時代は変わり、昭和五〇年代になると、目で見て楽しむ、耳で聞いて快いだけでは満たされず、もっとおいしいものはないだろうかという方向をめざすようになる。食べ物なら味のいいもの、珍しいものを素敵な場所で食べた。いわゆるグルメ時代です。また、皆さんはデザイン関係者でいらっしゃいますので、早くからファッショニにはご興味があると思いますけれども、それまでドブネズミ・ファッショングと言わされた日本の働き盛りのビジネスマンのファッションが変わっ

ていくのも昭和五〇年代であります。さらにインテリアにもお金をかけるようになつてくる。

一言で言いますと、人間の感覚器官、目、耳、鼻、舌、そういうものをして人間の心と身体にあら種の快楽や快適をもらしてくれるようなもの、これは物ではなくて、例えば言葉やイメージ、あるいは色や形、音や映像、さらには味や香りや肌ざわり、物そのものじゃない、いわば物の上にのつかっている、一言でいえば情報です。そして皆さん方デザイン関係の人とというのはまさにそういうものの上に、言わば言葉やイメージ、色や形、音や映像や味や香りや肌ざわりを付加価値としてどう組み込んでいくのかというお仕事に従事しておられるんだろうと思います。

このぐらい広く情報という言葉をとらえてみると、場合によるとそういう情報は人間の「情けに報いてくれる」かもしれない。

さて、そこで思い出していただきたいのは、言葉遊びで恐縮ですけれども、産業社会の装置や制度に働く情報のことを私が「メッセージ型の情報」と呼んだ点です。それに對して、人間の感覚器官、つまり目や耳や舌や鼻や肌、時にそれを喜ばせ、楽しませ、珍しがらせ、面白がらせる、あるいは快適にしてくれるような言葉やイメージ、色や形、音や映像、味や香りや肌ざわり——これは人間の心と身体に非常に快いマッサージのような作用をするので「マッサージ型の情報」と呼べないだろうか。こう考えてみると、メッセージ型の情報は近代工業社会の効率を高めるために作用してきましたけれども、マッサージ型の情報は近代

工業社会が提供した様々な工業製品によって豊かな生活を実現した人の心と身体に新しい喜びや楽しみや面白さを提供するというわけであります。恐らく現代の日本というのはそういう段階を迎えるよう思つてゐます。

ところが、そうなると難しい問題が起つてくる。実は、戦後の日本社会というのはとにかくがむしゃらに工業生産を高めようとしてきたわけですが、そこでモデルになるのはアメリカでありました。アメリカ社会と同じような社会をつくろうということで、あまり良し悪しとか善惡を考えずにここまで走つてきた。だからこそこれほど急速な日本社会の発展というのが実現できたんだろうと思います。それはそれで良かつた。ところが、そういう未曾有の成功をおさめた結果、日本は現代世界のトップランナーに躍り出でてしまつた。トップランナーといふのはいつも何かの理念と申しますが、あるべき姿を提起しなければならないわけですが、そういうものが今の日本にはまだありません。

さて、そこで人間がめざす価値をまとめていうときに、真・善・美というふうな言葉があります。そのうち、真実を追求するのは科学であつたり技術であつたりしますし、善という価値には宗教や倫理が対応します。じゃ、美というのは誰がつくらるのか。いうまでもなく、芸術であつたりデザインであつたりするわけですが、現代の日本を見てみるとだいたい善というのは地に落ちております。善を守るべき人が目茶苦茶している、善はども頼りにならない。科学も具合が悪い。今、唯

一頼りになるのは一つの美しさ、一つの理念に集中するかどうかはわかりませんが、人間の気持ちを感動させるような美しさだけなんじゃないか。ところがそのモデルがない。それが今日、過剰な経済力をもつてしまつたにもかかわらず世界でなかなか相手にされない日本の悲劇のようです。だいたい政治家というのはそういう意味ではいつも時代遅れなんですね。

一方、我々一般大衆の生活をみると、そういう一つのあるべき姿がわからないにもかかわらず、なんとかそういうものを見つけたいという動きがあり、例えば食べ物の領域ではグルメ、衣服の領域ではファッショն、住まいの領域ではインテリア、旅や観光の領域ではリゾートに出かけたり、あるいは特に若い女性を中心にしてカルチャースクールみたいなものが広がるという風に形作られている。大衆社会は、一言で言うと「生活美学」をめざし始めている。これまで「生活文化」という言葉がよく使われましたけれども、それに対して今日は、あり得べき生活の姿を追い求めるいうことが非常に大事になつてきているわけです。しかもそういう人の欲求に応えるような商品やサービスを上手に提供すれば、人々は正確にそれに反応してくれるということもまたわかつてきた。「生活の美学」、人々がそういうものを求め出した時代に、恐らくこれから産業というのはそういう人々の欲求に応える「花の文化」を提供することが必要なではないでしょうか。「文化」を非常に広くとりますと、衣食住から、言葉から、ものの考え方まで含めて人間の生き方すべてを「文化」という言

葉でまとめる立場があります。私自身が主としてやつております文化人類学というのはそういう考え方を致します。ところが、やがて生活の根っこが固まつてくると、人間は必ずその上に花を咲かせたくなつてくる。ありとあらゆる植物が根がちやんと大地に根づき、太陽の光を受けて育つて、幹や葉っぱがしっかりと花を咲かせたがるものと同じことです。そういうたとえ話から考えますと、現代の日本というのはまさに近代工業社会によつて物質的な生活の根っこが固められ、いいよいよ花を咲かさなければならぬ時代を迎えていきていると考えていいくんではないでしょうか。

人は「観光」を求める

もう一つ注意すべきは、我々が日常生活を送つてゐる空間といふのはごく狭い範囲に限られているという点です。ところが人間はもつと遠くまで行きたい。現代の日本人に、金があつて暇があつたら何がしたいかと言つたら、旅や観光という答えが出てくるわけですが、旅とか観光といふのは、一定の範囲内でしか生活できない人間が、「現在のここ以外の場所」に行きたいという、そういう欲求を持たざるを得ない存在であることに由来するものなんではないでしょうか。従来からこういうものが人間の文化として定着してきております。のみならず、時間の永遠性に連なるとすることを願う宗教もまた必ず人を旅に駆り立てます。キリスト教でもイスラム教でも日本の仏教でも、あるいは神道でも、巡礼の旅がある。現在のこと以

外の場所に出かけていって、そこでいろんなことを学んできなさいといふのが巡礼の旅であります。じゃ、そうして、旅から帰ってきた人は何をするのか。周りの信者たちに、世の中はこんなふうになつてゐるんだという珍しい諸国話を提供する。もうちょっと洒落た人なら、それを例えれば絵画や文学であるといふうな芸術に高めてしまふ。そこで旅、宗教、芸術をワントレーニングにしてみますと、これはまさに人間の想像力、イマジネーションにいくらでも応えてくれる遊びの場を提供するといふことになるんですね。

現代といふ時代、あるいは二一世紀といふ時代は、旅、宗教、芸術といふうなものが人類のフレンチアとして広がる、そういう時代だと思います。その時にそれじや、科学や技術や産業はどうなるのか。恐らく旅と宗教と芸術を支えるインフラストラクチャーとしての役割、それを支える装置と制度の体系として、科学や技術や産業は奉仕すればいいということになるんではなかろうかと思います。なお、ここで私は宗教といふ言葉を遣いましたけれども、宗教は必ずしもこれまでの既存の宗教が力を持つということではなくらうと思ひます。既に怪しげなものがたくさん出ておりますけれども、そういうものを超えて、言わば人間のイマジネーションを時間的な永遠性につなげるにはどうしたらいいんだろうかということを暇にあかせて考えることが一つの非常に重要な意味を持つようになるということです。その時に、きっと旅とか観光といふものが非常に大きな役割を果たし始めるにちがいありません。今日、観光と



申しますと、すぐに思い浮かぶのは企業の団体旅行ですが、実はこの観光という言葉は本来、大変由緒正しい言葉で、「易經」に「観光とは國の光を觀ることなり」と書いてあります。観光の觀とい字は「見る」という意味でありますけれども、中国語の觀には「示す」という意味が含まれておられます。つまり、旅の體驗の中に新しい価値を生み出し、それを人々に訴えかけていく。そのためにはフツフツとその人それぞれが内部から知恵やアイディアを沸き立たせればいいんですけれども、なかなかそうはいかない。そこで有名な日本のフアッショングザイナー、高田賢三にしても三宅一生にしても、新しいファッショントラベルという時には、しばしば秘境の民族のコスチュームを見るために旅をするということになる。そこで刺激を受けてデザインを考え出すというわけになります。

こういうふうに考えてみると、情報産業が基幹的な意味をもつ現代という時代にあっては、都市が単にその中で豊かな工業生産を高めるということだけでは成り立たなくなる。旅であるとか宗教、あるいは芸術、そういうものこそが都市にとって非常に重要な要素になつてくる。日常的には出会うことのない珍しい物や事や人と出会える場所、人々はそれを求め始めている。それに応えることだけが二一世紀の産業になるだろうというわれであります。実際、今日、観光産業の市場規模は世界中で二兆ドルと言われております。世界中の軍事費を足しても一兆ドルです。去年はあれほど湾岸戦争やったにもかかわらず九〇〇〇億ド

装置としての京都

ところで京都の街の非常に面白いところは、一方においてありとあらゆる人々を喜ばせ楽しめ方の刺激を用意する盛り場——古くは四条河原に成立——と同時に、そういう刺激から切断された遊びのプロデューサーのための空間をちゃんと持っている点なんですね、例えば祇園です。僕はまだ年がいかないからかもしませんが、三人芸妓さんが来たら歳の合計二〇〇歳というような所へ行つて、あんまり面白いと思えないわけですがでも、もうやることないほど遊んできた人はあそんで言わば遊びのプロデュースするわけです。もう盛り場へ行つても面白くない。そうすると、今度は自分でプロデュースしようじゃないか。じつさい京都には伝統的な服飾産業がある。どういうものが売れるのだろうか、これは盛り場を歩いて情報を集めるのも大事ですけれども、時にはそういうものを忘れて、ぼんやり祇園あたりで三人合わせたら二〇〇歳という人を相手にして、うじやうじや言つてゐるうちに、ひょいっとアイディアが

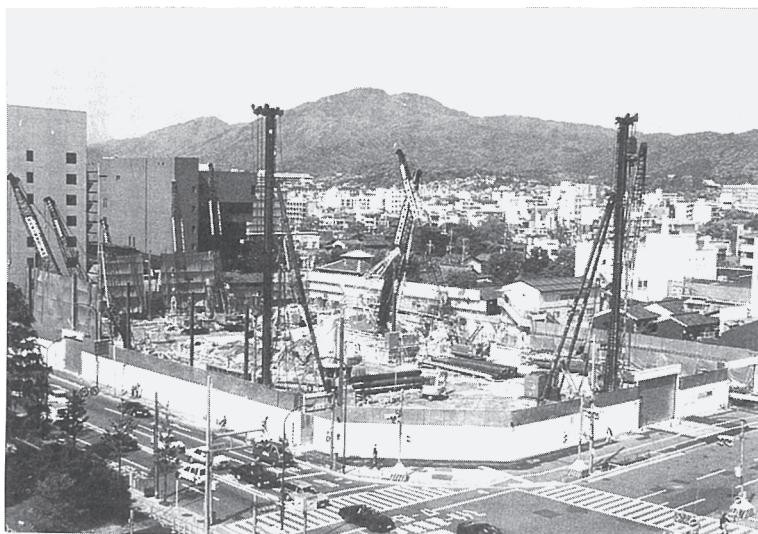


出てくる。これは京都の大切な資源でしょう。そんなことを考へるようになつたのは、あるとき、「この京都がもし東京みたいになつたらどうしますか?」という質問を僕は大企業のエグゼクティブにしたときのことでした。「それは困る」というんですね。というのも、ヨーロッパ、アメリカからバイヤーが来た時に最新鋭の工場を見せると一応感心はしてくれる。けれどもそんなにびっくりはしてくれない。びっくりさせて帰らせないことには具合が悪いというので、最後には京都へ連れてくる。京都へ行くと、あの丹精をこめた庭であるとか、洗練されたもてなしとか、あるいは大仰というか、あの器に入った京料理、これを見せると彼らはやっぱりびっくりしてくれる。日本の近代化の秘密も理解してくれる。「こういう緻密な文化があつたからこそ、あなた方は近代以降にヨーロッパから新しい科学や技術が受け入れられたんですね」と言つてくれるというわけです。ただ、間のある部分はどうしても守らなければならない。僕は単に伝統を守れと言つているんじゃないんでですよ。けれども、そういう伝統、あるいは都市空間のある部分はどうしても守らなければならない。ただし、それは京都人のものだけではありません。日本中の企業が使うんですから、そういうところを守るために、あまり財政の豊かでない市とか、巨大企業もない京都の財政だけに頼つていてはダメでしょう。もし本当に日本の企業・産業が京都を必要とするならば、これを全国の企業あるいは国家レベルで守れというふうな法螺も吹かんならん時代がやってきているんじゃないか、と思うわけです。

また、この京都の街というのは、これ以上大きくなれないという利点があります。米山俊直という人類学者が、「日本文化というのは小盆地宇宙で培われた」と指摘しておられますけれども、最も代表的な小盆地宇宙がこの京都なんですね。なぜそれが良いのか。たとえば京都の都心で夜遅くまでお互にダボラを吹きながら酒を飲んで、二時、三時になつてもだいたいタクシー、〇〇〇円ぐらいで帰れるんですね。もし東京で同じことをやろうと思うと皆九時になつたら帰らなければならぬ。だんだん話が面白くなつたところで皆帰らなければならぬ。だいたい新しい知恵、アイデアが出てくるのは夜九時以降でしょう? その時間、東京人は皆通勤電車に乗つてゐるわけです。僕は京都のこのスケールというのはサロンと言いますが、そういうものを楽しむのに適切な大きさだと思います。しかも周りには比較的豊かな緑がある。一皮めくればあっちこっちに庭園・建築・工芸・芸術・芸能、ありとあらゆる美の遺伝子、美しさを伝える遺伝子が様々な形で残されている。そこにはやっぱり一つの伝統というふうなもののが流れている。ただし、先程も申しましたように、僕は単に伝統を守れと言つているんじやありません。というのも、そういう伝統を守る一番良い方法はその伝統を打倒するような新しい力が出てくことにほかならないからです。その点でまだ、京都という街は今、手をつければ世界中から伝統をぶち壊してやろうという優れた才能を集めただけの潜在的な力を秘めている。これをなんとかうまい力で生かせられないのか。世界からそういう

才能がやつてきて、伝統を打倒する試みをする。その際、良いものなら、良いと評価する目利き、これがちゃんと京都にはいる。東京にも、名古屋にも、大阪にもない目利きの力、恐らくこのあたりに京都の強みがある。僕は京都生まれ、京都育ちですから、京都のことを褒めたりなんかするのはあまり好きじゃないんですけれども、しかしながら京都の持っている資源だけは改めて捉え直しておかなければならない。そういうことを考えると、ますます現在の京都の行政や財界がやってる建都一二〇〇年のための記念事業というのは、いかにつまらないものであるかということになるような気がします。

京都というのは常に最新の技術を導入して、新しいことを試みるおっちょこちよいであり続けてきました。そういうものを取り込むことによって美しく快適で遊べる生活都市になってきた。それが一二〇〇年を迎えるにあたって、他にもあるのかも知れませんけれども、コンサートホールと和風迎賓館と京都駅、あとは民間がやる京都ホテル、これでいいのだろうかというわけです。現代の技術、あるいは日本の経済力というものを最大限に利用すれば、もつと面白いことができるんじやないか。明治の初め疏水を掘ったことを思い出してほしいと思います。使い道があるかないかわからぬのに、その疏水の水力を使って電気を作る、電気を作つたらこれで電車が動くといでの市電を動かすわけでしょう。明治の初めですよ、日本に工業が全くなかった時代に、これはどうらい大法螺もええとこ、巨大事業だったはずであります。



いまホットな話題を提供している
京都ホテル建設現場

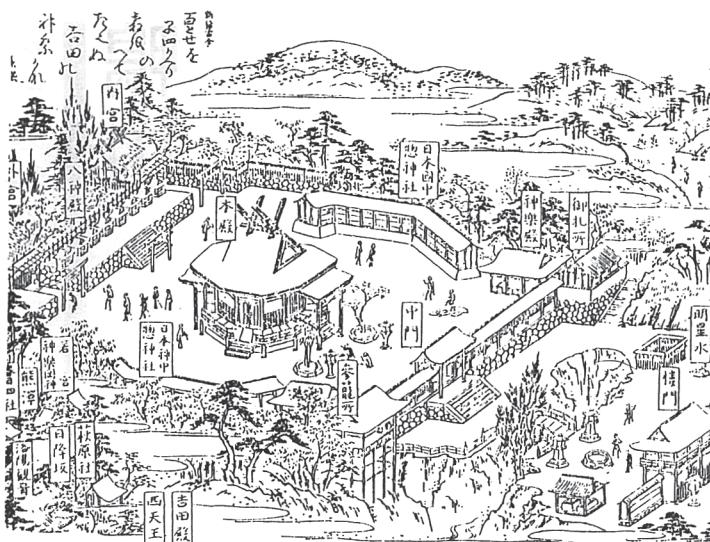
それに匹敵するようなことを今、京都で実施するにはどうすればよいか。僕はこの街に巨大な大深度地下開発というようなことができないだらうかと本当に考えております。何のためにそんなことをするのか。土地の値段が高いので地下を使おうというような、そういう貧乏くさい考え方から地下開発をやるのには、僕は反対であります。そうではなくて、まだまだ京都には先程申し上げたように様々な資源がある。場合によつては建ち上がつてしまつたビルをぶち壊してでも、地上に快適な小盆地宇宙、人々が訪れるに値するような小盆地宇宙、この都市の人々が快適に暮らせるような生活空間を確保するために地下を開発してはどうかというわけです。この会場だつて窓は一つもありません。ビジネスの現場というのには必ずしも窓がなくとも快適な空間は作れる。僕はそこまで現代の先端技術、土木建築はきていると思ひます。そういうものは地下に埋めたらよろしい。そうすると地上に楽しく遊べる快適な空間が残るだらうというわけです。この京都、唯一日本に残つたいまや外国となつた京都を、近代化しながらさうには発展させながらうまいこと残すような方法を、日本の産業界は考へろ！ メセナでやれ！ そのぐらいのアイディアを京都の産業人、あるいは市民の間から、まあ法螺が大きすぎるのかもしませんけれども、ぽつぽつ考える必要があるんじやないでしょうか。

その際に忘れてはならないのは、京都の技術、あるいは工芸、デザインです。一つだけ挙げますと、たとえば京都の木工技術。今日、地球環境問

題というのは非常に大きい問題になつております。地球環境問題で運動している運動家というのは割合短絡的な発想の人が多く、木を伐つてはいけませんと言うわけですけれども、地球環境をきれいに保つためにはどんどん木を伐ることが大事なんですね。ただし伐つた後は植えないといけない。同時に伐つた木を建築物にして残すわけです。木といふのは炭酸ガスの塊みたいなものですから、それを固定して置いたら炭酸ガスは増えないわけです。燃えると具合悪いですよ。だから、どんどん木を伐つて木を植える。伐つた木は建築物として残す。これは常識に反するようでけれども、まさに空気中の炭酸ガスを固定するために非常に重要なことなんですね。こういう発想がなかなか京都から出てこない。

テクストとしての京都

あるいは京都はハイビジョン都市になつたそりでありますけれども、先程、京都には隠されている美の遺伝子がたくさんあると申しました。日本のファッショントレーデザイナーはわざわざ秘境の民族のコスチュームを見に行つてゐるわけでけれども、そういう人々、皆さん方も含めて新しい美を創り出そうとする人々に、これはものすごく良いテクストになる。ハイビジョン、これはこの世のものとは思えないほどきれいな映像を創り出す。ハイビジョンでニュースを見ると皆嘘っぽく見えますね。三〇年近く粒子の粗いテレビを見慣れておりますと、ニュースは今のテレビのほうが



わかりやすい。ハイビジョンというのは恐らく今後もこの世のものであり得ないようなものを見させる工夫が必要なんじやないかと僕は思います。そういう京都の資産の掘り起こしというふうなこともできるでしょう。

そういうことをしながら二一世紀の基幹産業となる「観光」をどう産業化していくのかということについて目を向けていく必要があるでしょう。今日、世界中には三、〇〇〇とも四、〇〇〇とも言われる民族がおります。国としては僅かに一八〇ですから、世界中のほとんどの民族は異民族が支配する国家の国民なわけです。それが今、二〇世紀の後半になって、我々も国を持ちたいということで問題が吹き出しております。それに政治的に加担するのは政治家に任せておいたらいわけですが、そういう様々な文化を持った諸民族の文化活動を励ますような試みができないだろうか。和風迎賓館と同時に文化迎賓館、——京都という場所を使って、あなた方の民族文化を発展させながら京都の芸術や芸能の伝統をぶち壊すような創造をしてください、というふうな世界に対する呼びかけができないのだろうか。それはイベントという形をとつてもいいだらうと思ひます。また、JRにはたくさん貨物車が残っていますから、建都一二〇〇年を前にして、あの貨物車をアーティストに一輪ずつ渡して好きなようにそれをデザインしたり展示したりしてもらう。そして、かつて近代工業社会においては、工業生産を支えるための原料やその製品を運んだJRの貨物車を、今度はまさに情報の媒体として枕崎から、あるいは稚内

から動かしながら、その中で世界の若手アーティストやデザイナーにいろんなパフォーマンスを開してもらう。まだ日本のJRの駅には引き込み線が残っておりますので、そういう所でイベントを始める。今まで人が集まらなかつたようなそういう場所に賑わいができる。最後に京都の街で、梅小路ですか、あのあたりでなんとかどえらいそいういイベントに集約する。この街には昔から科学の伝統もあります。科学と芸術を総合するようなデザインの試みというふうなことも考えられるんじゃないでしょうか。

こういうふうに考えてみると、建都一二〇〇年というのは、そこで一二〇〇年の歴史を振り返ってお祝いするのではなくて、それはせいぜいコンサートホールと和風迎賓館と京都駅ぐらいに任せおいて、実は「一二〇〇年から新しい京都の歴史が始まるんだ」という企画をこれから立てることが大事なんじやないでしょうか。実際、七九四年にここに平安京ができた時には何もなかった。そこから街づくりが始まったわけですから、建都一二〇〇年もそれを出発点にして新しい動きが展開されるという立場で、もう一度京都の街づくりを考え直すことが今、大切になつてきているんじゃないかと思います。

こんな話が「美觀醜觀論」というふうな議論と結びつくのかどうか、心許ない限りでありますけれども、これで私の話を終わらせて頂きます。最後までご静聴頂きまして、どうもありがとうございました。（拍手）

鴨川

町並み

と

裏側

で

真鍋 本分科会のテーマは「鴨川と町並みの裏側で」となったわけですが、こういうテーマとなつたときさつを述べさせて頂きます。まず創建当時は内裏が北辺中央に位置する長方形だった。が、

こういう形は百年も保てなかつた。右京は捨てられ、田畠と化し、市街部は元の半分だけになつたのです。その後、戦国乱世の時代になると、市街部はこれまで最小のものとなつた。室町を中心として上京から下京の小さな範囲に縮小してしまつた。あとは荒廃してしまいました。こうした状態がしばらく続いた後、秀吉の手により今日の京都の原型が形造られたのです。創建当時のプランでは一街区の縦横の寸法はほぼ同じ正方形をしていました。彼はこれに縦にもう一つ通りを通して二分割しました。こうして、今日地図で見られる縦横の比率が一対二の短冊形の街区で構成される京都の姿が出来上がつたのです。かなり強引な改造だつたわけですが、他にも彼はいわゆる「お土井」即ち土手のようなものを造り、これより中は都、外は都市ではないとした。かくして、京都の市街の外形が定められたのです。この時はまだ京都の東端は創建当初と比すると少々はみ出しがしてゐるが、ほぼ同じ位置にありました。また、この時同時に、市中に散在していた寺を、今日寺町と呼ばれる一つの通りに集中させた。これらの寺をして都の東端としたわけです。

その後京の街はいくつかの変遷を経て、江戸期に入ると拡大していく。この拡大は常に東進するものであつたために、秀吉が定めた東端は破られ、河原町が出来、さらには鴨川を越えて「花遊界」

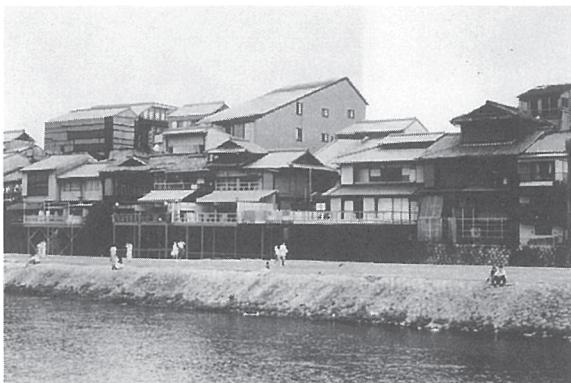
チユーテー
真鍋宗平（KDA）
パネリスト

尹 孝鎮（韓国・京大院生・建築学）
神谷雅子（朝日シネマ支配人）
南澤 弘（KCC）

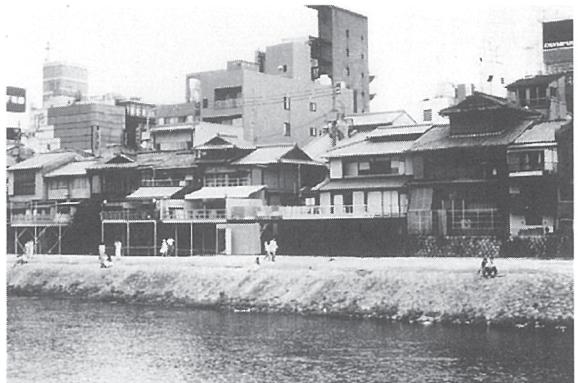
●「高さ」と「幅」の微妙な関係

尹 私は町屋などの都市住宅を研究しています。京都の景観についての新しい視点をもたらすなどということはできないと思いますが、数年京都に住んでみた感想等をお話したいと思います。今日のテーマは私の専門ではなく深く調査、研究したわけではないので、事実と異なることがあるかもしれません。さて、京都は街の中央に鴨川があることにより、他の都市よりも自然の豊かさを感じることができます。鴨川と河原町、建物と町並み、人々との相関関係という視点から、鴨川を中心とする街作りのあり方について提案をしたいと思います。さて、都市景観とは自然の他、建物、人間、車、道路など様々な要素から成り立つ

が形成されたのです。このように鴨川はかつては都の果ての「裏側」だったのですが、今もこの事実の痕跡は町並みの外観の中に残っています。日本の都市は、例えば中国のそれとは異なり、城壁をもたない。このことが市街の変化を可能にし、また都の東進的拡大を也可能にしたのです。この東の先にたまたま鴨川という大きな川があつて一つの句切りを付けていた。その他諸々の要因もあって、鴨川縁に裏通り風の情景が残つた。ここから、今日我々が川沿いに見ているのは木屋町といふ特殊な狭い通りの裏側であるという状況が生じたのです。また、この辺りは、遊興街であることなどもあって、人々の細々とした生活のドラマが繰り広げられるのです。以上が私が当分科会のテーマを『鴨川と町並みの裏側で』とさせて頂いた大体のいきさつです。



ビルの平屋根を傾斜屋根に、電柱電線を消去、屋上看板消去、河川敷に芝生を敷いて修景した C G



鴨川東岸四条大橋上より先斗町、木屋町方面を望む現況

つて います。こうして出来た景観をどう感じるかはそれを見る人や時間によつて異なつてきます。私が今日のテーマのために鴨川縁を歩いてみてみたのは、この川が狭いということでした。それ故、この川がもつと広いものであつて欲しいという欲求が人々に起るのでは、と思いました。といふのも、ここ二年ほど建物の高さと通りの幅が人に与える感覚を調査したことがあつて、その結果、通りの幅が狭く建物が高いときは人間は圧迫感を感じるということが判つたからです。この調査結果を鴨川に当てはめると、鴨川をせめて少しでも広く「見せようとする」ならば、川沿いの建物は低くすることが必要だということになります。しかし、昼はなるほどそうなのですが、夜に川端通りに行つたときに私はこれとは異なる印象をもちました。つまり、対岸の高層の建物から漏れる明りが水面に反射してとても綺麗だったのです。そこで気が付いたのは、鴨川は都心の繁華街である河原町、先斗町の背景を成しているのだということです。先斗町の通りは二メートルほどの狭い通りなので、現行の建築法ではファサードを改装することはできても建て替えることはできない。すると、先斗町の建物は必然的に老朽化していくきます。これにどう対処すべきかは、今現在「田辺案」できめ細かな具体的措置を検討しているところらしいのですが、これまで申し上げたように、鴨川とその河原、その裏にある建物、その前の狭い通り、これらの全体的な関連性、一体性を考慮していかなければならぬのでは、と思います。

神谷 アサヒシネマの神谷と申します。鴨川の河

原が歌舞伎の発祥の地だということはよく知られていますが、ここはまた映画の発祥地でもあるのです。一八九七年にここでフランスのリュミエール兄弟の発明になるシネマトグラフの試写が行われたのです。そこで、鴨川が登場する映画にはどんなものがあつたのだろうと考えてみると、「寅さんシリーズ」など極めて少ない。ところで、フランス映画では、セーヌ河がよく舞台となつています。これには石の文化としての街の成立立ちと京都の街の成立との違いがその背景にあつたのかも知れません。私どもでは、昨年京都と映画との関わりを考え、市民の力で京都をテーマにした映画を九四年に、つまり建都一二〇〇年の年に完成させるという市民運動を開始しました。これにはたくさんの人々に参加して頂きたいのですが、それにはどうすべきかと考えたところ、鴨川の河原にアベックがたくさん並んでいるところを俯瞰で撮るのはどうだらうと思い付きました。私たちの運動は、映画を作ることを通して京都を見直していくこうという主旨なんですが、このようにして、文化の源として、また市民の憩いの場としての鴨川の河原が映画を撮る段で重要な場所であるとともに、保全していくかなければならないと感じました。また、南座の改築に際してファサードだけをそのままに残したのは、鴨川に面していたからこそではないか、と思います。このことは鴨川沿いが京都の景観にとって重要なものであるというこちましたので、この辺りはよく知つております。

さて、昨今、鴨川の景観を守ろうということが言われていますが、これに関してはいつの状態を守ろうというのかが問題になってくると思います。先ほど申し上げた通り、私はこの辺りで生まれ育っているわけで、この辺りの変遷をずっと見てきたことになります。例えば、鴨川の姿も、今は本流と床の下を流れる細い川、禊川との「二重」になっていますが、この川は後から人工的に作られたもので、昔はなかつた。また、建物に関して言えば、四十年ちょっと前には、家並の向こうに見えるのは市役所の塔の部分、昔の京都ホテルの煙突だけでした。後の民家は総て木造でした。三階建てというのもありました、京都全体についてみても、高い建物と言えば、他には昔の朝日会館、南座、大丸、現在は近鉄デパートになっている物産館、それぐらいしかなかつた。

話をまた鴨川に戻しますが、四、五十年前は石垣もなく、川床がもつと高かつた。夏になると、一面に草が生え繁り、夜は蚊が多くて、今のようないベックが腰を下ろすことなどできない状態でした。このような鴨川が周囲の町並みと釣合がとれるかとれないかなんて誰も気に掛けはしなかつたんですね。また、毎年何度か、台風などがきたときには、川が溢れ出し、床は人がその上に乗つたまま流されることもしばしばでした。橋も、殊に木造の橋はよく流されたものです。先斗町には五、六十年前の建物も残つてはいますが、今のように飲み屋等なく、お茶屋さんばかりでしたので、昼夜ともに薄暗く、華やかな街ではなかつた。このように街の姿とは時の経過と共に変化して

いくものなので、先述したように、いつの景観を保持するのかを明確にしなければいけないとと思うわけなのです。また、時と共にライフスタイルも変化していくことも考慮せねばならないでしょう。昔の住宅には、例えば水洗便所もなかつたし、長屋などでは共同便所のところさえあつた。経済成長の結果、我々の生活は豊かになり、このような生活環境を甘受することはできなくなってしまった。つまり、景観を保持しながら、このライフスタイルの変遷に対応するのは困難なのです。さらに言えば、現在行なわれている景観保全論では、過去の悪かつた部分、現在では改善された部分に關しては眼をつぶり、気にくわない部分だけをとやかくいっているような気がします。このように考えますと、一からデザインをし直す以外に手がないと思うのです。

●橋を情報発信の場に

奥藤(会場) 河合さんの研究所のデザインを学ぶ学生たちが、建都一二〇〇年を記念して、三条大橋と四条大橋の間にもう一本橋を架けて、そこを情報発信基地的なもの、つまり若い人たちが集まつて来て各種のイベントができるものにするというテーマで制作展をしました。デザイン自体は学生の手になるものですから稚拙なところがありますが、ここに橋を架けて若者を集めようという発想が出てきたところが面白いと思うんです。ところで、先ほど南澤先生が「一からデザインをし直す」という提案をなさいました。これはとても面白い提案だと思いました。というのは、京都といふ街は、例えば西陣や、歓楽街としては祇園、河



原町、文教としては京大周辺というように、地区毎に機能分化がなされた街である。このことを前提として、地区毎に一からデザインし直すという方法もあると思います。先ほど申し上げた学生たちが三条大橋と四条大橋という地区を選定したというのも、この地区が人が集まって、愉しみ、新たな情報を出していく地区であると、京都に住む若い人たちが気付いていたからだと思います。

南澤 実は私は後一つ疑問に思っていることがあります。それは、京都がなぜ景観を保全せねばならないのか、ということなんです。困ることに、京都には歴史都市としてのイメージを保全してもらいたいという全国民の期待があるようなんですね。これは外國のオープン・ミュージアム的な期待なんです。京都の場合は都市であるので、人間が生活する場としてのミュージアムにならざるを得ないわけです。こういう期待に対しても、「迷惑だ」ともいひ得る。が、実際は、エコロジー保全論にも似て、古いものを保全するのが善で、これに異を唱えるのは悪であるという短絡的な価値観が出来上がっています。これと、国民の期待とが相俟つて、古いものを保全せざるを得ない状況になつてている。

しかし、この状況がレベルが高いもので、そこから何等かのデザイン的コンセプトが生まれるなら、建物や橋を建造する段階の基準も生まれてくる。が、実際にはこういったものはなく、あるのは高さや色の制限的な些末的なもののみなのです。また、保全するのだというのがボリシナーになつてしまふとすれば、いつの時代の景観を守るのかと

いう最初の問題に戻ることになります。例えば、ヨーロッパの町のように、復元するところまでいくのかどうか、という点に関してのコンセンサスが出来上がっていない、というのが現状です。

川勝(会場) 本音を言えば、私は高層の近代建築等が景観を損なうとは思わないんです。景観の保全がよく言われますが、今の京都の町並みが美しいとも言いません。うちの近所には古い家並が残っているところもありますが、美しいと思わないだけではなく、むしろ汚く感じており、あれを残せとおっしゃるのなら、私は京都から出て行きたいくらいです。よく「市民グループが反対している」と新聞に出ていますが、東京の人などはあれを読んで京都の人々が総て反対しているようにとらえているようです。私としては反対していないので、困惑しています。ところで、これはさつきの南澤先生が「一から建て直す」とおっしゃつたことと意味的に合致するかどうかは判りませんが、東京にアーフビルズというのがありますね。詳しくは知りませんが、長屋等を買収して、近代的なビルに建て替え、元の住民は無償でそこに住む権利を与えたと聞いております。これは一種の「計画都市」ですよね。私はよくここへ出かけましたが、非常に美しいと思いました。何も大都市の中に古いものを残す必要などなく、日本情緒を味わいたいなら、金沢に行けばいいと思います。もし「一から建て直す」なら、区画を決めてその一帯を買い占めてかかる他ないと思います。

柏木(会場) 私も今の方と同じような意見です。文化とか歴史とかは時代時代で生きて流れていく



ものですね。京都に関しても、古いものを保全するというのは間違いで、京都人の感性をもつと信じるべきです。古いものの中で人がいいと思うものは残していくし、反対に汚いものはなくなつていく。変に高さ制限などと言うから、二間間口の六階建てといった醜い建物が出来るのだと思います。また、こういうことをいつも論議しているわけですが、この論議がどこにも反映されず、無駄に終わっています。それはともかくも、街を綺麗にするというなら、どこそこを守ろうとするよりも、市街の電柱をすべて地中化するというようなアプローチをすべきだと思います。

南澤 古い町並みを保存することにするなら、いつの時代のものを保存するのか、ということを決めなければならないのです。外国ではオールド・タウンを決めて保存している所もありますが、余りうまくいっているようには思えません。スウェーデンにもこれがあるて、私は何度が訪れたことがあります。が、行く度に悪くなつっていく。とうのも、以前は人が住んでいたのですが、段々ゴースト・タウン化してゐるんです。京都の場合は、今保全しようとしているのは昭和の初期の書院作り風の建物が一般庶民に普及してきた頃のものであります。だとしたら、場所を限定しなければならない。このように地域を限定しながら、当然近くのビルがどこそこから見えるということになりますが、これがいけないと、いうことになつたら、保全は不可能になつてしまふ。こういう形の保全を行なうのが正しいのか正しくないのかということを決める必要もあります。

●保存のクオリティ

神谷 私は、高さが今なぜ問題になつてているのかが判らないんです。少し時代を遡ると、京都タワー問題というのがあって、あの時も論争があつたと思うんです。が、はつきりとは知らないんですが、あの時の議論は一部の学者とかのもので、市民レベルのものではなかつたようですね。私たちは京都に住んでるわけですから、京都はこうあって欲しいと言い続けることは大事だと思うんです。ですから、今は一人一人が各々の立場、価値観で市民レベルで論議されている、もちろんそこに対立が生じるわけですが、それ 자체が重要なんだと思います。それと、先ほどお話しした映画作りのアイデアを募集している中で、ゴジラが京都タワーを壊してしまい、後に何かを建てるというのがありました。このように壊してしまつて新しいものを作り出す場合には、京都には歴史的な伝統があるということを前提とせねば、と思います。

南澤 建造物には経年変化により良くなるものと

また、もし保全しないのだったら、新しく作るもののが形態に関するコンセンサスが必要。こうした点に関する議論が全くされていない。例えば対立する二者がいて、一方が他者を説き伏せようとするとしますと、相手に「まったくそのとおり」と言わせなければなりません。こうなつて初めてことが決着する。が、お互い京都人同士では、いわば親戚同士みたいなもので、こういう気の悪いことはなかなかできません。ですから、いつまでたつても決まらない、アドバルーンばかり上げて、後はうやむやということになつてしまふ。

悪くなるものがあります。京都タワーの場合はどうか。私は最近余りあれが気にならなくなつてきました。あれ以来その周囲に高い建物が増加した高いいものであれば時の経過と共に自然物になるのだと思います。それ故、現在建っているものについては余り心配する必要はないんです。

が、木造の建物は経年変化によつて良くなるというものではありません。祇園なんかでは比較的古い町並みが保存されていますが、例えば料理屋の『由良之助』のように鉄骨を用いながら町並みの形だけは踏襲している、そういう建物に十年もすればなつてしまふでしょう。時が経てば、このような建物が増えて、外観的には統一がとれるかも知れません。ただ、これがいいことかという問題は残ります。

長谷部(会場) 私は札幌出身なんですが、現在は京都で建築設計事務所をやつております。今度、うちの事務所と東京のある事務所が共同で『由良之助』の近くに「社交場」を設計することになりました。ところが、この東京の事務所が出してください案というのは、チャイナ風の、京都を莫迦にしたようなものでした。このことは京都以外の人の京都に対するイメージを如実に表していると思ひます。ですから、このような外部からの期待に応えて保存することはできないと思うんです。

南澤 コンクリート等で木造の和風建築のコピーワークに何等かの意味があるんでしょうか。

長谷部 木造の建物と石造のものとでは、経年変化の事情が異なるということがありますね。高さ

も木造だとせいぜい三階までです。三階以上の建物で日本風にしようということはとてもできません。和風にこだわらずに質のいい建物を建てていくという方が私はいいと思います。

真鍋 話が、町並み、高さ、様式論、建物論に変わつきましたが、テーマとしては川の風景ですので、ここで話を元に戻したいと思います。このまま放置すれば、鴨川べりは成行き任せの変化になってしまいます。ですから、この辺りの視点の変化、構造の変化、遊び方の変化、都市の愉しみなどは航空写真でみると綺麗ですが、実際行って見ると汚い、ということが起ります。今回のテーマに関しても、私にとっては鴨川の畔にビルが立つてることには関心がない、むしろ川が澄んでいるか、自然が生きているかとかの方が重要だと思ひます。

尾崎(会場) 一つ提案があります。デザイン会議も十回以上になり、毎回多くのデザイナーが集まつて、熱心に議論しているわけですが、何等そこで論議されたことが、市や府によって実行されたことがあります。そこで、会議である程度話をまとめて頂いて、市に働きかけるという実際の行動に移すようにしてはいかがでしょうか。

南澤 保存、保存と言つてはいるのですが、これには政策が伴つてゐるわけではなく、スローガン





が勝手に走っているに過ぎません。が、我々が議論を尽くすことが苦手な民族であっても、多数決でもいいから保存か開発かのどちらかに決めないといふことはちょっとおかしいので、保存か再構築かですね。木材以外の素材で和風建築を作るか、放つておくといふ、一つのデザインコンセプトを作りそれに従つて「開発」していくか……

尾崎　ただ、橋の一本でもいいから結果が欲しいんです。

河合(会場)　東京に子供の城というのがあります
が、あのような具体的なものを……

柏木　私は、私たちが話したことが行政に反映されるようなところまでやっていくべきだと思いま
す。今日もマスコミが来ていませんが、マスコミ
を呼んでもらはなければ、私たちの意見が反映される方法
を作れるはずなんですね。

南澤　「保存も開発も、概念 자체がおかしいので、
反対や」という狼煙を上げたら、どうなるでしょ
うか。

柏木　いいものを残そうという議論が起こるのは、
それを作った時代にはいい感性があったということです。今の時代の感性にもあうようないい
ものだから、残そうとするわけでしょ。だとした
ら、どれそれを残すとかいわなくても、今の京都
で生まれてくるいい感性のものは次の時代に残つ
ていくはずです。私たちには、高さとか機能とか
よりも、デザイン的に街に調和していくものを考
える力があるわけです。それを反映する市民運動
をしないといけないと思います。

佐々浪(会場)　私の家は大丸の近くと河原町にあります。今日の議論でもそこに住んでいるものの立場で考えて欲しいのです。保存か開発かという問題は、例えば大丸が建ったときからありました。この問題は個人によって大きく意見が食い違うんです。ですから、看板や電柱をなくすといった誰でもが美しさを感じるようなものを、この会議で行政に訴えるようにしなければと思います。

長谷部　電柱を地中化するのは成熟した街じやない
いとできないそうです。

河合　私は歩道橋が醜く思います。今日も車でこ
こへ来るときに見たのですが、たくさんの歩道橋
が鋪だらけになつてゐるんです。

南澤　あれはね、全国どこでも無用の長物になつ
てるんです。誰も上らないんだから。

真鍋　今日は、経済効率とかいった今までのハ
ドな都市論とは違う観点が出ました。確かに最近
やつと社会学などを含めた学際的な議論をやろう
といふ機運が出てきているようです。先ほど看板
の話が出ましたが、イギリスでは看板の規制をす
るのに半世紀以上をかけたのです。近代的都市化
はイギリスでは日本に比べて百年くらい前に起
つていますから、議論の量もそれだけ少ないわけ
で、急いでやらなければならない部分もあります
が、もう少し時間をかけてやらなければとも思
います。具体的にやらねばならない点については、
今日の報告としても事務局をせつづいてみようと
思います。行政に対してもかかわらせると働きか
けていかねば、とも思います。今日は長時間どう
もありがとうございました。

看板

文化の 看板

は

バロメーター

●看板の統一と街の美観

奈良 それでは、ただいまから第二分科会「看板は文化のバロメーター」というタイトルでパネルディスカッションを始めさせて頂きます。今日のパネルディスカッションでは、それぞれのパネリストの方にそれぞれの立場から屋外広告物看板などを主に話題提供をして頂きたいと思います。それではまず佐竹さんよりスライドを交えて話題提供して頂きます。

佐竹 京都市都市計画局・都市景観部都市景観課の佐竹でございます。今日はまず、スライドを交えてヨーロッパの看板と京都の看板を見比べて頂いて、その文化の違いを感じとつて頂ければと思っています。そのあと京都市が行っている屋外広告物行政について、どんなことをしているか説明したいと思っています。

それでは、スライドの方に入らせて頂きます。

(写真は割愛) まずパリですがスライドを見て頂いてもおわかりのように、パリには電柱が一本もないことがわかつて頂けると思います。つまり、パリでの電線の地中化は一〇〇%なわけで、それに対して京都ではわずか一七%であります。

次に、公衆電話や薬屋などのマーク類ですが、フランスやイタリアなどのヨーロッパ諸国では、マークだけですが、日本の場合ではマークだけでは物足りないらしくてわざわざ書かなくてもわかるのに「電話」と書いて説明しているのが現状です。私はこのようなマーク類は万国共通にするほうがよいかと思っています。

チューター
奈良磐雄(KDA)
佐竹和男(京都市都市計画局・都市景観部
都市景観課長)
三野廣史(野口計画㈱代表・建築家)
恩地惇(KDA・GK京都)



三条通のアーケード、広告物がすべて統一されている。

はりアーケード看板でも、パリでは、ほとんどのものが統一看板となっています。しかし、京都ではそうでない所が、まだあります。そこで、これ（写真）は、京都の三条通のアーケードですが、私どもがこのアーケードの許可をする時に、関係者と一緒に相談して統一看板になったのです。このようなことから、みなさんにもわかつて頂けたと思いますが、日本人はフランス人やイタリア人といったヨーロッパの人々とは違い、「看板に派手な飾り付けをしないと、その街には活気がない」というような価値観をもつているようです。ここまでがヨーロッパと日本の看板情勢の違いでしたが、それでは次に、屋外広告物看板に対する京都市の取り組みをご説明したいと思います。まず、看板の色彩的な問題ですが、例えば「コ

カ・コーラ"の看板(写真)を例にとりますと、皆さんもご存じのとおり、赤のベースカラーに白の文字が全世界共通のマークなのですが、京都駅前に同じような看板をつけたいとの要求がありました時に、京都駅前は京都市内の中でも特別地区として広告物規制が厳しいので同じ物を設置されでは困るということを厳しく言つた結果この世界共通のカラーを反転させて白のベースカラーに赤の文字にして、随分おとなしめな看板におちついた例の一つです。この他にも、ファミリーレストランやコンビニエンスストア、ガソリンスタンドにいたるまでベースカラーを反転させるなどして京都市では看板の規制を行つてゐるわけです。

次にパチンコ店の問題ですが、これは皆さんもご存じの通り京都に限らずパチンコ店の看板がそうとうエスカレートしてきて、街の景観をこわしてきています。そこで、私どもは京都府警と協力してパチンコ店の看板がどうにかならないものか

いろいろと働きかけましたところパチンコ業界のほうで省エネルギーや都市景観上の問題もあり、昨年の六月一日から自主規制をする事になりました。その内容は看板の色を四色に限定したり看板を小さくするなどいろいろあります。最近できたパチンコ店のなかには、非常にシンプルなデザインのものが出てきており、その成果は十分にあつたと思います。

次に私どもは行政を行つてゐる者ですので違反広告物に対してどんな対策をとつてゐるのかお話し致します。まず電柱や歩道に許可もなくかつて看板を設置したりポスターを貼つてあるのを見かけます。私どもはこれを「禁止物件」と呼んでいるわけですが、このようなものに対してもうしているかと申しますと、これは屋外広告物法という法律に基づき強制撤去ができる権限があります。まして、毎月一回定期的にこういったピンクビラ等を中心に強制撤去を実施しているわけですが、何度も撤去してもまたそいつた看板がでてくるのが現状であります。業者の方もこれを「捨て看板」と呼んでいて三日間設置してあればその看板は成功だといつてゐるらしいのです(笑)。そして行政側といしましてもこういった人を現行犯逮捕していますが、違反広告物の数はいつこうに減らす、年間そういう予算をつかつてゐるわけですね。そこで、撤去していける違反広告物の数ですが驚くべきことに年間で立て看板や置き看板に関しても二万本でポスターは四万枚もあるのです。そこで私どもは、対策の一つとして地域の人々にもよびかけて防犯運動をしています。この他、違反



京都駅前の看板、白と赤の色が反転されている。

といろいろと働きかけましたところパチンコ業界のほうで省エネルギーや都市景観上の問題もあり、昨年の六月一日から自主規制をする事になりました。その内容は看板の色を四色に限定したり看板を小さくするなどいろいろあります。最近できたパチンコ店のなかには、非常にシンプルなデザインのものが出てきており、その成果は十分にあつたと思います。

次に私どもは行政を行つてゐる者ですので違反広告物に対してどんな対策をとつてゐるのかお話し致します。まず電柱や歩道に許可もなくかつて看板を設置したりポスターを貼つてあるのを見かけます。私どもはこれを「禁止物件」と呼んでいるわけですが、このようなものに対してもうしているかと申しますと、これは屋外広告物法という法律に基づき強制撤去ができる権限があります。まして、毎月一回定期的にこういったピンクビラ等を中心に強制撤去を実施しているわけですが、何度も撤去してもまたそいつた看板がでてくるのが現状であります。業者の方もこれを「捨て看板」と呼んでいて三日間設置してあればその看板は成功だといつてゐるらしいのです(笑)。そして行政側といしましてもこういった人を現行犯逮捕していますが、違反広告物の数はいつこうに減らす、年間そういう予算をつかつてゐるわけですね。そこで、撤去していける違反広告物の数ですが驚くべきことに年間で立て看板や置き看板に関しても二万本でポスターは四万枚もあるのです。そこで私どもは、対策の一つとして地域の人々にもよびかけて防犯運動をしています。この他、違反

広告物条例にはひつかからないのですが、街の景観上悪い影響を与えてる自動販売機や派手なカラーの建物に関しましても何らかの対策をねつてあります。

話は変わりますが、違反の取りしりよりも、もちろんですがやはりいいものはほめなくてはということで、京都市都市景観賞という名前で建物、绿地、公園、広場、広告物を中心に懸賞制度を取り入れています。そしてこれ（写真）は、昨年の受賞作品ですが、町並みと調和しているということで受賞したものです。

最後になりましたが、私どもは、シミュレーションを導入したりしてこれから京都の街づくりをしていきたいと思っています。以上の報告をもって終わらせて頂きます。

●「生活文化」としての看板

奈良　どうも佐竹さんありがとうございました。非常にわかりやすい説明を頂きまして、京都市としては大変努力をされていて、その成果も当然でてきてるわけですが、まだまだ問題は多く含んでるし、今後やはりコンピューターを導入する等して景観のチェックをさらに進めていきたいというお話しでした。

それでは三野さん続いてよろしくお願ひします。

三野　私は建築家の立場から建物や看板とはどうもののかを説明したいと思います。

それではまず最初に建築に必要な看板の歴史について戦後の移り変わりを話したいと思います。看板は戦後かなり激しい移り変わりがあつたような気がしますが、終戦直後はただ「家があればい

い」という感じで食べることすら難しかったわけです。だから看板もその家につければよいということで材料も鉄板にペンキ塗りといったものがほとんどだったのです。それから経済もちょっとづつましまして、東京オリンピック、大阪の万国博覧会、オイルショックに到るまでの経済の影響と看板の移り変わりが対応できるのではないかなあと思うのですが、その中では「家があればいい」という時代から木造の家を鉄筋風にみせるという時代になり、それから万博ぐらいから建築家によるユニークな建物が出だしたのではないかと思います。そしてその頃の看板を見ますとアルミニウムにガラス関係の看板が出てきたわけです。そしてオイルショックの頃から脂脂性のボリで出きた看板が現れてくれました。



京都市都市景観賞（昨年）の受賞作品。



電柱電線消去、看板の文字サイズを縮小した CG



河原町四条上る東側を望む現況

に従って看板を造ってきたのですがニーズというものがなくなってきたんじゃないかなあという気がするからです。そして現在では建物自体がアート化されてきていてアート化という問題は看板にも及んでいるわけで看板が目立つたり、またそうでなかつたりしているのが現状であるようです。私は、こういった傾向は東洋的思想がかなり影響しているのではないかと思っています。そしてこれについてもう一つ原因だと思われるものは、物がありあまっていることだと思っています。つまり私がいいたいことは、物がなくなるというような不自由を知らなければならぬ時代になってしまっているのだということです。つまり不自由さがわかつて初めてありがたさがわかるのではないか、そしてそれを看板に置きかえて考えてみてはどうかということなのです。言葉を変えていうと潜在的なニーズを創り出さなければならぬ時代になってきたということです。

次にいえることは、建物や看板を作る時に自分の個性だけを押し付けずもつと他の人々の意見を取り入れるなどして周囲の人々のことも考えて設計することが大切なではないかということです。これは自分の個性だけで看板を作るとかえて先程の佐竹さんの写真にあった商店街のように「これでもか、これでもか」という感じの看板になってしまうと思うのです。もともと建物や看板は単純で質素な長い生活文化の中から生まれるべきものなんだと思うのです。そしてそれが環境にやさしいデザイン、環境に適応するデザインではないでしょうか。

それでは次に、建物と看板の関係についてお話ししたいと思います。一つを例にとっていいますと、一階をテナントとして貸し出して二階からを事務所としているビルが最近多いわけですが、こいつたものは最初イメージしていたものと全く違ったものが起き上がってくることが多いのです。つまり、どうしたことかと申しますと、私たち建築家がビルを建てそのあとからそこをテナントとしてオーナーが貸し出し、決まるケースが多いわけで、そうなってしまってはもう私たちの手から離れてしまつてますので、そのあとに看板を吊られてしまつてはイメージしていたものとは全く別のビルが出き上がってしまいます。つまりこの問題はビルが出てしまつてますので、そのあとに看板を吊らなければならぬ時代になつたときに看板屋がビルを建てる上で最も考えなくてはならない問題の一つかと思っています。

そこで今日のテーマにもなつてゐる「看板」についてですが、まず看板屋のことから申しますと看板屋の種類も様々ありますし、職人もいなくて、道具も揃っていないような営業のみをしていて看板屋、看板のみを作る看板屋、そして両者を合わせた看板屋と大きく別けて三種類の看板屋があるのでですが、そこで看板のみを作っている看板屋限つていえば、既製品だけを作っている所と、オーダー品だけを作っている看板屋があります。

そして次は看板そのものの話になりますが、看板には京都市に届けを出している看板もあればそうではなく無届けの看板も多いのです。そして先程のスライドを見ていて感じたのですが大手のメーカーは比較的届け出している所が多いようですね。

次に看板の質の問題ですけれども、先程もお話を



したように看板には既製品のものとオーダー品のものがあるわけですが、既製品の看板はどうしても飽きがきやすく建物にマッチしないものが多いうことで、どうしてもオーダー品の方が多くなっているようです。しかしオーダーのものが良いとはいいきれい所があります。それはオーダーのものは既製品と違つて非常にメンテナンスがやりにくいことがあります。

以上のようなこと頭にいれて看板づくりをするといい看板が作れるんじゃないかなあと思います。これで終わらせて頂きます。

奈良 ありがとうございました。建築に実際たずさわっておられてその立場から難しい問題などに取り組んでおられることが分かりました。そしてやはりこれから先は物より心というふうな部分でもっともっと新しい価値観でただ「目立てばいい」ということだけではダメだということを質とかデザインを通してお話しして頂きました。

それでは三番目のパネリストの恩地さんの方から話題提供してもらいます。よろしくお願ひします。

●『木屋町景観整備計画』

恩地 それではさっそく話には入りますが私が今、一番考へていること、時代は具体論に入るべきだということです。つまり今までとは違つた切り口をもたなければならぬということです。

それからもう一つは、今日ここに行政の方が来られているから申し上げるのではないのですが、今日いろいろな問題があげられていますが、その根源はそもそも市民にあると私は考えています。



四条河原町の交差点
(看板は大きければ良いというものではない)。

つまりそこに住んでいる人々が何もしなければだめだということとしてそれを改善することが重要だということです。そこで考えましたことが市民のレベルを上げるということです。しかし、京都市民（一五〇万人）全てのレベルを上げていくことはまあ夢のような話でありまして、そこで考えましたことは、可能性のある所を徹底的にサポートをしていき、具体的なポイントを押さえてそこをモデルとしていけばいいのではと思っています。今日はその辺りを中心には話を進めていきたいと考えています。

それでは本題に入ります。私は先程申しました可能性のある場所として木屋町（三条～四条間）について改善をすることを計画しています。これ（写真）は、木屋町ではなく河原町ですが私はこの写真を見て「もうこれはダメだ、こんな看板をみて買う人なんていやしない」と思いました（笑）。つまり、大きい看板をビルの上にのっけるだけでなくもっと看板の本質に迫れといいたいの

現在の木屋町通りを改善したシミュレーション。
看板を下へずらし、歩道を整備



です。そこでなぜ木屋町を例にとったかと申しますと、木屋町は最も散策に適した性格をもつていて、全くそれがなされていないからで、もっとみんなに歩くことの喜びを知つて頂きたいと思っています。

そして、看板はやたら量が多くて大きければよいというものでなくて、もっと人間スケールにあつた看板を造るべきだと思います。そこでこれ(写真・下)を見て頂きたいのですが、私がこの写真を使つたのは、このBARの看板が小さくて良いからです。もちろん、ただ小さいだけではダメです。質が問題であり工芸的なレベルまで引き上げていくことが大切なあります。

それでは次の話題に移らせて頂きますが、私はこの木屋町を徹底的に歩く喜びのあるスペースにしようと思っているのですが、これ(写真・上)は看板をもつと人間スケールによってデザインを表現してはどうかとシミュレーションを導入して作つた物です。要するに人間スケールにするということは、看板を3m以内に集約してしまうということです。もう少し詳しく申しますと、高い所に看板を造りましても誰がそんなもの見るのかといふことです。実際、現在ある看板の多くはそういうものが多いわけです。だから私はもつと人間スケールの看板にしてそこを通る人々に見やすいものにしていきましょうといいたいのです。こうして木屋町をもつと歩く喜びのあるスペースに改善していくば京都という街を一か所で表現できるのではないかと思うが、このように街造りを行う最後になりましたが、このような街造りを行



看板の良い例：小さくて工芸的なレベルまで質を引き上げている。

奈良 非常に具体的なケーススタディを挙げて頂きまして、これなら意味があつてできそうだなあというようなデザイン提案をして頂きました。最後になりましたが、一朝一夕ではできませんがそれぞれの立場から美しいものとはどういうことであるのか、いろいろなレベルで判断できると思います。その辺をさらに研究していく、またデザイナーの方はどんどん具体案を出していくって頂きたいと思います。又、これをきっかけにスタートするべきではないでしょうか。そういうわけ一応これで閉めさせて頂きたいと思います。どうもありがとうございました。

公共デザイン

を

新建都

の
顔に

道家 本日の総合テーマは「京都美観醜観論」ですが、建物中心でなく、環境全体へと目を向けていきたい。本来、民間の会社や個人が、建物を建築したり設計したりする時には市民の声があるべきです。大阪や神戸の街が綺麗なのに比べて京都は、ここ二〇年間ぐらい、公共的な場所においてとくに疑問を感じさせられます。そこでもう一度、京都の公共的な場所の美しさと醜さについて光を見て議論を進めていきたいと思います。

藤本 公共空間デザイナーとは聞き慣れない言葉かと思います。都市を考えるときに普通いわれるのは都市デザイン、アーバンデザインですが、公共空間デザインとは、珍しい切り口です。公共空間とは、誰でも入れる場所と捉えられ、一般的には外の空間の約30%といわれていますが、しかし私はそこから見えるもの全てが公共空間と考えています。

都市らしさとは、公共性がいかに広がっているか、重みを持っているかということです。どうやつて作っていくかといいますと、市や国のお金だけではなく、プライベートマネーによるパブリックの形成というものが重要な要素になってきます。それから都市空間とは生活の場でありまして、自分の家のように自由自在にできるものではないだけに、非常に大きな要素になってしまいます。また、公共空間を生活環境として捉えると、目に映るだけで、感性に影響すると思います。次世代を担う子どもたちにも大きな影響を与えるものなのです。

具体的にみると、公共空間はいろんな要素から成り立っています。道路、広場、交通機関などが

ありますが、さらに細かく見ていくと、道路一つをとっても、構造物、バス停、ガードレール、路面表示などたくさんの要素から成り立っています。そもそも街を構成するものは、それぞれの個性を持つているのであり、悪いものはないのです。ただ、その組み合わせなどによって悪く見えてしまったことがあるだけなのです。色においても、悪い色などなく、組み合わせによって気持ち悪くなったり良くなったりするのです。

私の仕事ですが、まず性格づけ、個々の要素のコーディネイトを行います。従来は標準設計の多かった土木分野のデザインなわけですが、機能を満たした上に、化粧を促す作業をするのです。特にハード面での安全性、快適性、心理効果、ソフト面の追加や、女性が弱者になりやすいといったことからノーマライゼーションに心がけています。

●公共空間に求めるもの

道家 最近は、高さ問題でいろいろ議論になっています京都ホテルなんかも実は、総合設計制度という言葉が使われていますが、あれは、周辺にみんなが入れる空間を作れば高さを割り増すということとして、つまりお話しもありましたように、プライベートマネーで建てられた建物でも公共的性格を出すことになります。

清水 学生の時以来、十年近く東京にいましたが、いちばんその時「京都」を意識したと思います。意外と京都にいると京都のことを意識しないようです。卒業論文では庭を研究しましたが、調べてみると、重要な庭のほとんどが京都にありました。このことはよく知られていません。現在では、京

チユーター
道家駿太郎 (KSK)
パネリスト

藤本英子 (チ、デザイン代表・公共空間デザイナー)

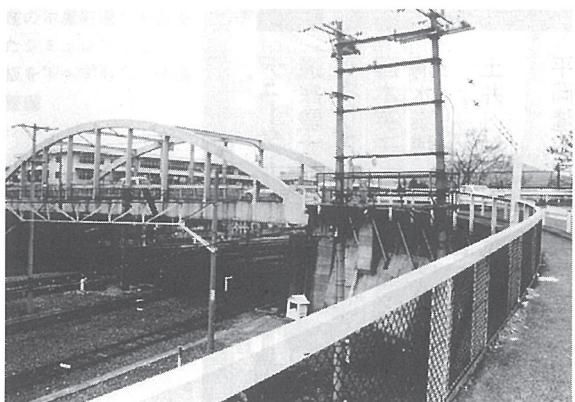
清水泰博 (SESTA DESIGN・環境デザイナー)

土井 勉 (阪急電鉄文化・技術研究所・都市計画家)

平岡隆一 (NDK・服飾デザイナー)



電柱を消去し、金網・フェンスを生垣にし、鉄橋の色を鳥居の朱色にした。



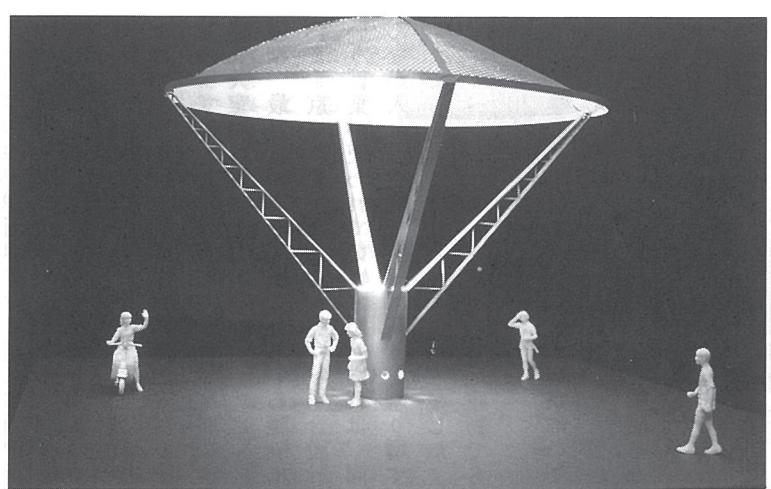
京都駅東側塩小路陸橋を望む現況。

都、とくに建築の外部空間に興味を持つています。公共空間にこんなものがあつたらいいのにない、といった提案をする仕事をしています。

これは（写真・下）街路樹という作品です。今街中の街路樹では木に対する訴えかけというものが忘れられてしまして、意味がないように思われます。この作品は金属で作られていますが、木漏れ日の空間を作り出しています。取り付けられたスピーカーからは環境音を流すといったことも考えています。また、夜になると照明器具にもなり、思わず寄っていきたくなるような、木の本来持つていて役割を果たしています。

次は立川の再開発計画に提出したものですが（写真割愛）、ここは東京とほとんど一緒に緑がなく、砂漠といったイメージです。そこで森を作ろうという試みから、パラソルでもつて自然の木を表し、ここを通ると鳥の鳴き声が聞こえるといったスペースを作つてみました。ここは立川のシンボル空間として設計されたのですが、次の下鴨神社（写真割愛）は、せっかく京都のシンボルとして昔からありながら、それをうまく使いきつていません。

次は昨年の環境美術大賞に参加した作品です（写真割愛）。三島市にある川ですが、ここでは上流に工場ができてしまつて水が出なくなつて、なんとか「水の都、三島」の川を救おうということです。シンボル空間を創造してみました。川の脇ではなく、中を歩くような感覚が得られるという普通はあまり体験できないような場所を作つてみようということです。また、枯山水も配置し、水で



作品「街路樹」。木の本来持つていて役割を果たさせたい。

親しめる一大公園を作つてみたらと思いました。さらに、ここでしか見えない富士山という演出もしてみました（写真割愛）。大噴水を用いて富士山から水があふれ出ているといった光景や川の中に映し出された富士山です。

次は、植物園付近の鴨川です（写真・次頁）。川の中に障害物を作るのは、河川の流れを妨げるところから、現状では簡単に新たに作れません。ですから、すでにあるものは非常に大切になつてきます。しかしながらどうもそのことが忘れていて

るようです。

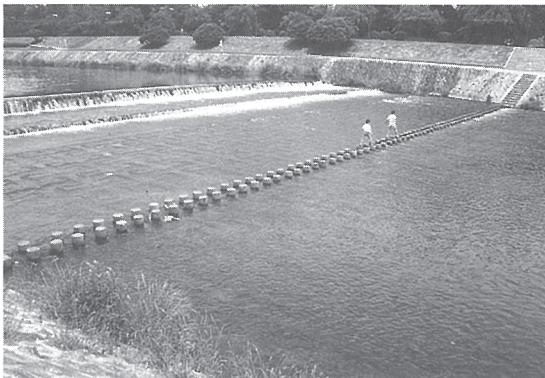
次は三島市の橋を設計したものですが（写真割愛）。橋の上というのは気持ちのいい所です。しかし留まるスペースがなければ、たたずむことができません。これは水に親しむことを前面に押し出してみたものです。橋は都市において風景をゆっくり眺められる所なのです。

写真は以上ですが、全体的に京都を見てみますと、京都のお寺や神社が公共空間として意識されていないようです。また、新しいオープンスペースがあることから他の都市と比べて立ち遅れの感がします。私がいちばん煩わしく思うのは河原町のアーケードでして、ない方がずっと良く感じます。現状では、下の繁華街の景観と上の山の景観とが切り離されてしまっているのです。借景的効果をもつと生かしていくべきです。

●「道」は大切な要素

道家 デザインソースが京都の中にあるのが、京都の利便性かなと思います。

土井 昨年まで勤めておりました京都府役所では主に都市計画局に勤めていまして、都市交通計画を担当していました。土木の計画というのは、道路や河川をどういう風に安全、効率的にするかで、ベースになるのは“数値”なのです。デザインの世界では主觀的なものがあるのですが、工学の世界では数値が重要なのです。つまり、十人中五人が良いと言ったのか、それとも十人全てが良いと言ったのか、それが問題なのです。都市交通計画とはまさに数値でして、交通を量として捉えます。どれくらいの交通量があるから、将来どこにどう



川の中にある道で、水に親しめる一大公園を。

いう道路を作つていこうという風に計画していくのです。道路ができるがると街の枠組みができるかもしれません。ですから、まず道路をきちんとしないと街はできません。

では潤いのある道とは何でしょう。スライドを見せながらアンケート調査をすると、緑の多いものが一般的に得点が高いようです。例えば、今出川から植物園へ到る加茂街道です。しかし、緑が多ければそれで良いのかというとそうではないようです。そこでデザインがその役目を果たしているのです。

全国的に御池通りは高い評価を得ています。普通は通りの中央にある植栽が、歩道寄りに二列あります。ところが、警察には評判が悪い。それは植栽と歩道の間からとび出す車による交通事故が多いからなのです。私自身としては、大人の社会として気をつけなければならないこととして、良いものを作るべきなのです。成熟した社会が技術とデザインを作り出す要素になるかも知れません。例えば、池や川の周りの柵ですが、ヨーロッパには日本ほどそれがあまりません（写真割愛）。日本では人が池や川に落ちると、池や川の管理者がその責任を問われます。では、柵のないところでは世界中で人が落ちているかというとそうではないのです。ただ落ちた時に誰が責任を問われるかが問題になります。しかし私はそれは大人の社会であれば問題ないと思います。

ここで土木の話をもう少ししておきます。土木のめざすデザインというのは、最近ではかなり変

わってきていますが、基本的には機能美をめざす、と学生の時に学びました。スレンダーな構造は、用と美を兼ねるということが基本的なボリシーになっています。まず環境を整えて、それからポントとしてそこに何かを作るというのが、デザイン発想として優れていると考えるのが、土木的な発想だと思います。

それでは少し街作りの話に戻して、公共デザインと街作りの関係について話していきたいと思います。基本的に都市計画が相手にするものが、公共デザインです。それは公共が作るものでして、道路や公園や河川が、それにあたります。

それではスライドで公共デザインの例を見ていただきたいと思います。

ワシントンのペンシルベニアビル（写真・右）ですが、手前にあるのは国會議事堂の平面図でして、縁もあって道路に付属した遊び場という点で面白いと思います。次はニューヨークのウォール街ですが、ビジネスマンがアタッシュケースを覗き込んでいますが、実は彫刻です（写真）。ケースの中には日本製の電卓があつて遊び感覚がいっぱいです。次はニューヨークのポケットパーク（写真割愛）です。私有の土地ですが、誰でも入っていいです。ようになっていて、頼めばコーヒーが飲めるところです。ニューヨークというのは車型社会の街で、人間が歩いて移動するのは疲れるのですが、私有の土地を生かして人の休める場所を作っています。次はニューヨークのIBMビルの中の公開空地です（写真割愛）。冬はとても寒い街ですが、周りは囲ってありますし、日本の竹が植えて



ニューヨーク。遊び感覚がいっぱいの彫刻。



ワシントン。手前は国會議事堂の平面図。

あります。お昼にはコンサートも開かれています。

こうしてみると、IBMが作ったものでありながら、市民も使えるということで、公共側のデザインにならなくていいのではないかと思います。

公共デザインは、市民が快適に、安全に、効率的に過ごせるためにあるべきで、それをどういう風にデザインしていくかということを考えていくと、それは少しづつ建築物以外の物に近づいていくのです。民間も少しづつ街作りに歩み寄っています。また、公共施設をみんなで考えようという運動が広がっています。

公共デザインの重要性を示す面白い事例があります。それは御池通りと五条通りです。両方とも戦時の防火帯から、戦後に50m道路として生まれかわってますが、それぞれの性格に合わせて設計されました。御池通りは、御堂筋型の京都のシンボルとなるように、道路の両脇に二列植栽を、また五条通りには自動車用車線として、真ん中の植栽が作られました。その結果、時間が経つとそれぞれの土地利用が変わってきました。五条通りには事務所系のビルが多く建ち、御池通りは気持ちのよい空間を提供しています。ですから公共デザインというのは都市計画とデザインが重なると大きな効果をもたらすことができるのです。

平岡 私はテキスタイルやアパレルの企画会社などいろいろやっています。公共デザインとファッションの融合を考える時にはその“街”に合う服装というのがあります。パリに行った時に、自分ならもっとすごいデザインができるのになと思ったんですが、京都ではそういう発想のソースがない

んです。伝統と新しさの融合が京都の課題だと思います。

これからは「文化の時代」と言われています。男によつて支えられた文化の時代へ、女によつて支えられた経済の時代から、女によつて支えられる文化の時代への転換期にあるのです。ですからファッショニも、経済で支えられたファッショニではなく、文化に支えられたファッショニにしていかねばなりません。

道家 NDKのみなさん。京都の環境は創作のエネルギーになるんでしょうか。

村上(会場)なりにくいですね。良い素材はたくさんありますが、プライダルデザイナーとしては、和と洋を分けねばならないので、うまく使えないのです。

道家 他分野の影響という点では、藤本さん、ファンションに刺激を与えようといった公共デザインはありませんか。

● 伝統と現代をつなぐもの

藤本 京都はそれぞれ素晴らしい要素を持つているんですが、トータルな美しさが忘れられてるんです。景観調査委員会の実態調査によると、白っぽい街に変わりつつあるといいます。伝統的地域のブラウン系から明度の高い近代的地域へと変わっている。つまり、京都の要素の良さに気付いていないがために、他の都市との同一化が始まっているんです。

道家 どうも京都のアイデンティティが欠けてきているようです。

土井 公共デザインにおいて、取り組みが遅れてますね。ストックが多すぎて、強い要望がなか

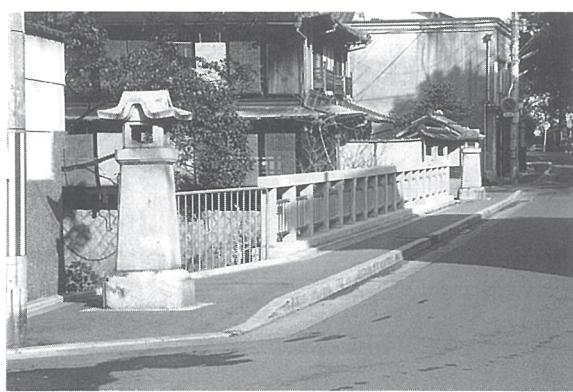


つた。他の都市では、戦災後にその街らしい所にしようとも努めるようになってきたんですが、京都にはいろいろあり過ぎて、ほつたらかしにされたいたようです。

道家 京都には本当にたくさんのストックがあるのか。またその現状で満足できているのかということです。他都市の事例を見てみましょう。



スイス・チューリヒ。橋の上が公園になっている。



平野神社前の橋。標準型のすりが狭まって、景観を無視している。

だと思います。

平岡 綺麗さだけなら他都市の方が綺麗なところはあります。せっかく一二〇〇年の伝統があるのですから、それを守って欲しいと思います。

宋(会場) この時代で断面を切るかといったこと

も考えられます。それと過去の積み上げに抜けていた点を見つめ直さねばなりません。

これはブレーメンの商店街です(写真割愛)。豚の銅像をベンチがわりにして、街を楽しくしています。スイス・チューリヒ、これはまさに橋の上が公園として(写真・右)、メリーゴーランドもありました。これに對して平野神社の橋ですが(写真)、間に標準型のありふれたものがあつて情けなく思います。こういうストックを生かしていくべきです。次はアメリカのサンアントニオです(写真割愛)。夜になるところでオペラが上演されまして、対岸が観客席となっています。

道家 今後京都はどういう風にデザインしていくばよいのでしょうか。街の問題点だと改善すべき場所はどこなんでしょうか。

清水 まず看板やアーケードなど過剰にあるものを削っていく。京都には現代のオープンスペースがありません。いちばん目立つところに起爆剤的なことをしなければなりません。

野田(会場) 我々が公共デザインを見て、すごいものができるんだなという動機付けが得られるものができればよいと思います。

道家 では京都らしさとは何でしょうか。

藤本 京都らしいデザインポリシーを持つことが重要なく、京都らしい編集ポリシーを持つことが重要

土井 まず議論される場所を作ることが必要だと思います。そして目指すべき方向、ポイントを見つけることが重要だと思います。

平岡 古い京都もあれば、新しい京都もある。伝統なり新しさなりを大切にするべきです。

道家 公共空間という新しい問題に目を向けた議論でした。印象的なのは、人が住んでいるからこそ、議論を重ねられるということとして、これが京都の特徴でしょう。車に囲まれて人間がいるのではなく、車を脱ぎ捨てた生活の場として見直していかねばなりません。

本日は皆様ありがとうございました。

ときめき

の
ない

京

繁華街

嶋 イタリアでは何千年前の建物が街にそのまま残っていて、一目で歴史を見る事ができる。すると次にどうしていかないといけないかがわかつていいから、イタリアのデザインは素晴らしい。

しかし日本の建物は木と紙で出来ていて、寺は別にして、街そのものに何千年前の建物が残ってはいない。建物についての話を進めるなら簡単ですが、「ときめき」がテーマなら、少し別の次元で話をしないといけないと思います。

皆さんにとつての「ときめき」とは何ですか。
辻 人との出会いですね。出会いが一番ときめきのもとになっています。

沢田 「ときめき」を広辞苑で調べると、「喜びと心配をする心のゆれるさま」となっています。
私は、自分で何かしたいという時に「ときめき」があると思います。

稲田 婦人方は四条通りでときめいていると思う。

●「排他性」の構造

大和 京都には四〇〇年くらい前から住んでる妖怪みたいな人がいるというイメージがある。実際は新しいこと考えてる人もいれば、妖怪みたいな人もいる。京都の建物にはときめきがないが、人にはときめきを感じる。理屈っぽいとか、排他的とか、いけずとかいう人は逆にいなくて、余り自分がことは表に出さず、相手をうまく利用しながら、やりたいことをやっていく。本音が話せない京都というのが、私にとっての妖怪です。建物にしても、本当はこうしなくっちゃと思いながら、少しずつ遠慮しながら前に進んでいく。

嶋 千家十職さんてありますね。「ご覧ください」

チユーテー
嶋 高宏 (KDA)
パネリスト
辻 寿々代 (放送作家)
沢田 正 (TVディレクター)
稻田 實 (四条繁栄会商店街振興組合副理事長・阪急地下道再活性化特別委員会委員長)

大和文昭 (KDA・きものプロデューサー「京朋」)

お買いくださるな」と書いてある。こんなバカなこと大阪の人間は書きません。

稻田 排他的という言葉がありました。私は生粋の京都の人間ではありませんが、今ではそれが好きになりました。外から京都を見て、こうすべきだということを二〇代の頃から四条の商店街で言い続けてきた。ショーレーションのようなことは、祇園祭の四条河原町での辻回しを考えると不可能です。私はアーケードを作り、道路幅を両端一m拡げました。それでも狭い。そこで一車線にして道路幅を拡げて、汚い防護柵をやめて植栽する。また車の速度制限を二〇kmにするなど、一二時から二〇時の間の四条の烏丸から祇園までの一般車両通行禁止を、五条署に提案しています。

嶋 お立場上、具体的な話ですね。ところで京都の街をTVの視点から見ていかがですか。沢田 京都を取材する全国ネットの番組は多い。それらは「日本らしさ」として京都をとらえている。ただ大阪だと人が寄ってくるのに、京都では取材に応じるのは観光客で、京都の人はうまく逃げる。京都人の選別が難しい。また四条河原町で取材するにしても、地上のみで、地下街がなくて困ってしまう。

辻 番組制作上、京都というのはターゲットがどこにあるのかわからない。既成概念の京都でなく、マニアックな部分をもつと押し出すべきです。人にもつとも、つきあいが深まれば、意外としゃべってくれます。

嶋 石堀小路や祇園町は女性に素敵と言われても、河原町は素敵とは言われないです。

稻田 昔は京都は和風な街だった。しかし阪急が乗り入れて、いろんな大企業が買収していった。我々は「白い壁運動」としてそれらと戦ったが、最近は法人関係にも協力を仰ぐようになつていて。何でもアイデアを教えて頂きたい。

石田(会場) 阪急の地下道は、最初の時点はどうしてああいう形になつたのか。

稻田 私は当時若手で、地下商店街にしたかったが、四条繁栄会の当時の会長が反対したことや、資金面での問題もあって、実現しなかつたのです。

石田 四条繁栄会の構成員には、純粹な京都の人は少ない。もともと四条河原町は一番京都らしくない街です。昔は四つの遊廓が歓楽街でしたし、今もそれぞれの地域で個性を出そうとがんばっておられる。私は祇園祭の役員を三〇年間やっていましたが、京都は年間四千万人の観光客の落とす力で適当に食うていい。そういう気のゆるみ、ぬるま湯体質が活性化をはかれない原因ではないか。

稻田 そうかも知れないが、若手は違います。

石田 京都というのは「だんはん」の町なんですよ。パトロンですね。そういう人が企業であれ個人であれもっと出てくれば、ときめきのある町づくりが出来るのではないか。

●アーケード無用論

嶋 今は税制の問題もあって「だんはん」はなくなつた。今は企業としての新しい「だんはん」の形を模索するべきでしょうね。

辻 私は地下街はイヤです。京都はとくに外が見えた方がいいのです。

大和 アーケードがあるから上が見えず、ビルの

美しさがわからない。工事でアーケードが取り払われた時は、本当に美しかった。日本中アーケードがあるのは商店街で、繁華街はない。雨が降れば地下で買い物すればいい。四条河原町は街といふより商店街ですね。

稻田 賛成です(笑)。グリーン商店街というアーケードのない商店街も市内にあります。

沢田 全国ネットのスポンサーに、京都の企業は数多くなっている。しかしそれらの企業が自分の企業イメージに「京都」をどう取り込んでいいか。阪急の延長で地下街が出来ると聞いて「何かが変わる」と思ったが、京都のど真ん中にただの地下道が出来た。これは京都の不可思議です。私にとって河原町は「遊べる」街でした。

嶋 大阪や神戸では青空の見える地下道がありますね。阪急の地下道にしても、もっと変化させるひらめきはないんでしょうか。アーケードにしても日本のは低すぎます。

石田 京都人自身が、素養と本物を見る目を持たなければいけない。そうするためには、「アメトムチ」の税制によって市民の協力を仰ぐ。また建て替えの障害となる前面道路4mという消防法の基準にても、全国を一律の法の網に入れるという横着さも問題です。

本郷(会場) 四条に鉢が通ることは重視すべきです。通りの持つ物語の理解できる工夫がほしい。道路にも、祇園祭だけのための「仕掛け」のようなものが欲しい。



四条通りより東山祇園を望む現況。



四条通りを歩行者道路にし、その中央に地下道との関連を持たせる半地下広場を造った CG。

嶋 昔は祇園祭の前になると、鉢を通すために市電の電線を外してましたね。ところで建築の規制は各自治体で自由にしていいんですか。

清水（会場） もとになるものは動かせないです。道路幅の問題にしてもそうでしょうね。

辻 今「テーマパーク」ってありますね。京都に何かのテーマを与えるべきでは。

石田 行政の方では「平安京」というテーマパーク建設の動きが進んでます。

また法人のバトロン化ですが、企業側の責任者の移動や、稟議書の問題もあって、なり得ないのです。しかし住友信託銀行は三階フロアを展示場のために山鉾連合会に貸してくれたり、五条署に食事を提供するなどの、陰の努力をなさっています。京都人らしいですね。

大和 変な話ですが東京の銀座まつりに、天皇陛下をお迎えに参りますということで、鉢を出したらどうか。一二〇〇年目に天皇に京都に還つて頂くことが一番のときめきじゃないか。

石田 「クレッソン発言」の時に、シャンゼリゼに鉢を出そうという話があった。飛行機事故での鉢の損壊の危険性から取り止めになりましたが、銀座なら可能でしょうね。建前では文化事業として、本音では企業に金をだしてもらうということです。

西村（会場） 建築家協会から来ました。今日は期待外れです。結局はイベント作りですか。飲食などの動的な部分だけでは、これから京都は駄目です。静的なあるいは個人の文化レベルが相当低下しています。京都の百貨店で物が売れないのは、

目が悪いんです。「美の遺伝子」が行き渡っていない。建物にかける金は京都が一なら、大阪二、東京四八です。京都の町屋の間口は六mですが、一軒だけで建てると六〇cm損するのに、共同で家を建てようという知恵知らない。

稻田 四条通りの北側で土地を有効利用して共同店舗をつくるという話があつたり、大宮から祇園までの地下道路も考えたりしたが、いずれも不成功に終わった。

西村 祭ごとで何かやるという発想はもう古い。既成概念にはない京都をもつと啓発する努力、「美の遺伝子」を次代の京都人に伝える努力を、マスコミも商売関係の人もしなければいけないのでは。嶋 祭はおっしゃるような平板なものではなく、人間本来のイベントであり、ときめきのエッセンスがつまっているものと思う。祭そのものを否定するべきではないのでは。

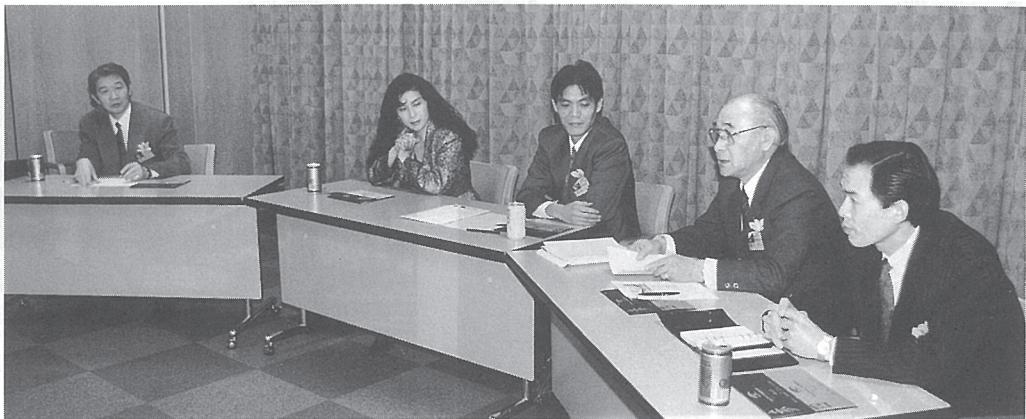
石田 遷都論議にてもかつてのいろんなしきたりを復活させるきっかけになればいい。

大和 皇居移転問題は「問題提起」です。皇居移転問題はあくまで、一二〇〇年の今何が出来るかを考えた場合のときめきの方法論です。

石田 建築家さんからも、金もうけ主義でなく、京都をよくするための逆提案をもつとして欲しい。嶋 京都商人独特的の「一見は入れへんで」を、むしろ売り込んでいくべきでは。

稻田 愛想のよい店もあります。一概に大阪はこう、京都はこうとは言えないと思います。

嶋 大阪では入ってきた客を「待つてた大将」と持ち上げますよね。京都は京都のときめきとして、



千家十職の「」覧くだされ、お買いくださるな」を、現代に押進めればいい。

稲田 それは無理です(笑)。私の店は愛想よくしてますから。

●物語を育む街

嶋 「喜びと心配の揺れ」をつきつめたら、いろんな可能性が京都にあるんじやないか。

稲田 地下道、それも祇園祭のエピソードを演出したものを作りたいですね。道も広くしたいし、駐車場も作りたい。また木屋町などの裏通りを生かしたい。四条より下の木屋町の方が京都らしいし、歴史もあるんですよ。

沢田 四条通りには信号が多くすぎると思います。

大和 アーケード撤去にしても、銀座まつりに鉢を持って行く話にしても、一人一人の今出来ることの実行がなければ、論ばかりで終わってしまう。私自身としては、御所の周りを一二〇〇のきもので飾ってみたい。京都はそのよさを外部にもっとアピールすべきなのです。

石田 きものを売る人がどうしてきものを着ないんですか。アーケード取っ払えと言う前に、あなたの業界の中で出来ることいっぱいあるんじやないですか。

また「お愛想」の問題ですが、企業と考えるか生業と考えるかの違いかと思ひます。

嶋 ここでコメンティマーの皆さんに逆に質問します。アーケードも外して、銀座まつりに鉢も出します。地下も出来たとします。ときめきますか。

大和 私が銀座まつりの話を出したのは、四条通りでの鉢の姿の方が本当はきれいなんだというこ

とを再認識させるためです。銀座の方がいいと言われないよう、電線を埋めたり、看板を外すという議論も起ころるでしょう。「無愛想」な店しかり、他の都市とは違う一つ一つの「こだわり」をいろんな部分で出来る街、「屁理屈」を教えないといけない街としてのときめきはあるんじやないか。かつて都であったことが実感出来ない。そういう点で一二〇〇年はスタートになるが、出来ることからしないと、すぐ一二〇一年になりますよ。

辻 「出来た」ではなく「出来るかな」「次どうする」と思うことがときめきだと思います。

沢田 それらが京都にとつてどういう意味を持つのか考えることにときめきを感じます。

稲田 計画したり工事をする。その一つ一つの段階ごとに感じるときめきだと思います。

大和 京都外の著名人に對するアンケートによれば、「京都=日本」だという傾向が強い。だからこそ、私物としてではなく、「世界の京都」として守り、外にアピールする。

嶋 「なんかしよう」という気持ちがときめきだということを結論にしたい。私はアーケードもダンボールもゴミも電線も看板もときめきにつながるんじやないかと思う。街がきれいかという問題ではない。

沢田 アメリカでも汚い街にときめきます。京都もまだまだ期待感を感じさせる街ですね。

辻 倉敷のようなきれいさではなく、人間の体温の感じられる街にときめくんじやないか。

嶋 京都は例外的にヤクザも歩いとつていいんじやないか(笑)。



稻田 四条通りは確かにきれいじゃないかも知れないが、女性たちは高島屋→藤井大丸→大丸→阪急というコースをとつてウインドショッピングなさるんです。アーケードにしても女性の声を反映したものなのです。横断歩道にまでもアーケードをつけたのは、信号が多いという条件つきなのです。私は今の四条通りでもときめきがあると言いたい。

大和 京都という街を、日本の京都として、「気持ちの上の買い物」をしに来れる街、心の観光に来れる街、「日本人」を確認に来れる街に残す為に、建築も考え方もイベントも総て、日本人ということを忘れないで。日本を見せる街とも言いますか。新しいものを求めて動いていくことがときめきだと思います。

石田 四条繁栄会がときめくには理事や理事長に年令制限を設けることでしょう(笑)。地下街の時の二の舞にならないためにも。若い人の声を出しやすいように制度化する。飲食街についての議論もしてほしかったですね。

最終的には外圧しかないでしょう。京都の町衆

自身で京都を変えるのは不可能です。京都のよさを一番知っているのは外国人ですから。日本人が京都を壊すのはけしからんという声をあげてもらつた時に、本当に実効を伴つた法律も出来るだろう。秀吉や信長がアメリカ人になつただけのことです。京都人特有の「あなたにおまかせします」ですね(笑)。

会場 鉢町だの祇園祭だの細かいこと言われても、

我々にはどうもわかりにくい。

会場 新幹線に乗つて京都に行こうという時にときめきを感じる。ときめきとはプロセスであり、躍動的なものです。他の都市にはない四条通りのよさを見出すところにときめきがあるんじゃないかな。四条通りに京都らしさがどこにあるのかわからない。ときめきを感じさせるには、演出と装置が必要だと思います。

嶋 そこが一番難しいところなんですけどね。

会場 シミュレーションを見て鉢通れんから無理とおっしゃいましたが、まさに京都人的と思います。かつて市電があるなかで、どう鉢を通すか考えたことを思い出します。

本郷 ときめきは視覚的な刺激の中で感じるもの

です。ただ人間は強い刺激を求めていくために、そこに間違いが起こる。洋と和のたたかいもあります。そして京都の魑魅魍魎さというイメージもあります。そんな中での現実の四条通りにいろいろ具体的に絞りこんでイメージしてみる。

嶋 最後に一言ずつお願ひします。
辻 動いていることがときめきだと再確認しました。

沢田 どんな形にも変化していく京都だからこそときめいていると考えさせられました。

稻田 制度は大事にしながら、商店街として挑戦していきたい。

大和 京都は日本を代表する都市である証明として、ぜひ鉢を東京に持つて行きたい。

嶋 アーケードは取れますか。

稻田 現実には取り得ません(笑)。

大倉（最初にスライドを上映）

美しい 町並み

幻想 なのかな

京都で、今、保存と開発が論議され、また、産業の衰退や相続税などの税制など、問題がたくさんあります。一連の写真にもそれが出ていたかと 思います。京都の街は、どう修復すべきなのか、どう新しく生まれかわらせるべきなのか伺ってみましよう。

●現実と幻想の中で

山崎 四年ほど前、シンポジウムで西陣について講演し、京都の町屋はもう建て替えの時期、祇園や産寧坂もそうです。伝統的建造物群保存地区だけ保存し、あとは、二階以上は外観を従来のように残し、高さ・看板などを規制するが、一階や内側は近代的にすればどうだと提案しましたら、総スカンを食らいまして、「今の西陣は、古い木造家屋の中で作っているのではない、清潔なところで作っているので、そんな観光客をダメすようなことはできません。近代的な建物のなかで作っていても精神は京都の人間や」と言わはりました。私が先日、新聞で書いたように環境と人間の心は一緒やというのがわたしの持論で、よくこう例えるんですが、京都の人間とアメリカ・テキサスのダラスの人間とそつくり入れ替えると文化はどうなる、これはどうなるともいえないもので、心とかたちは一緒にあります。西陣も着物を着る心にあった街のデザインを建築家やデザイナーと協力して作ったらどうでしょうか。

大倉 ありがとうございました。
では、脇田さん、和装の仕事を通してどうお考えになりますか。

大倉 ありがとうございます。
大倉達也（JIA）

パネリスト

山崎正史（京都大学助手・都市修景論）
脇田周輔（京都経済同友会常任理事・
黒竹節人（KCC・クラフトデザイナー）
沢井敬子（KDA・空間デザイナー）

脇田 私は一九二四年に室町仏光寺の布地屋に生まれた生粋の京都人です。年は取っていますが京都を愛する気持ちでは誰にも負けません。

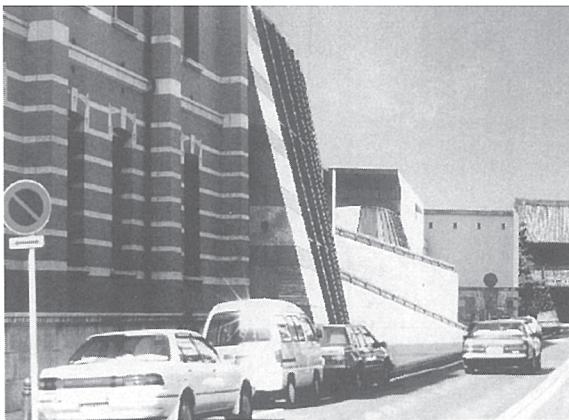
古来より京都では京の三山が見られ、京都と言えば、上京、中京、下京と東山を指していました。それら一帯も最近では耐用年数の切れた家が多くなり、町中の生活条件も悪化しました。それが、

若い世代の流出につながり、今、京都の町屋に住んでいるのは、ほとんど老人です。市内の小学校の廃校もありますし、京の中心部は過疎状態です。

ここ一世紀、市は街に投資するようなことをほとんどのしませんでした。観光で繁栄しておきながら、逆に観光資源に対してもしなかったのは怠惰でした。京都は昔から産業文化の中心、戦災も免れたのに幸か不幸かそれがために古い家屋がそのまま残り、耐用年数も切れたまま、再開発もできずにきました。又、今は職住の一致も不可能です。

京の街の一つ一つは約100m四方が単位となっています。この単位ごとに、地権を再配分し、道路を立体化して、特別の建築法を適用して、一階を営業に、二階を住居にするというのを考えているのですが。その中で新しいデザインをしながら、昔の屋並みに近いものをよみがえらせればと思いますが。これらは大手術で、市民・行政ともに痛みを覚悟する必要があると思います。

私の会社から京都の街を眺めますと、ペンシルビルがあちこちに突き出しているのが見えます。これは、近世の税制の結果生じた京都の町屋の鰐の寝床型に由来するもので、その土地の形そのまま



超モダンな建築物を加えめりはりのある町並みに修景したCG。



三条高倉より北を望む現況。

にビルを建てるとなあいうみつともないベンシリビルになるわけです。

これは、なにか規制するか、地権を再分配するしかありません。痛みは伴いますが、それは覚悟しましょう。

大倉 黒竹さん、クラフトデザイナーとして、また、古い町並みを活かしていく仕事をしておられますか、まず何か一般的なことからお願ひします。

黒竹 私も西陣生まれで西陣育ち、始めての仕事も呉服屋で、この中京界隈は私の基本になっています。京都のいいところは、木造建築がいまだにたくさん残っているところです。この木造建築の再生、価値観を活かしていきたいと思っています。

木造建築のよいところは、コンクリートの建物よりも耐用年数が長いことです。また、部分補修ができることも利点です。材料についてはやはり日本では日本の材木の方が長く持つようです。

海外で、街を見ていましても、屋並みは不規則で変化に富み、建物の材料・素材にその土地のものを使っていると連続性のある一体感があると美しいと感じことがあります。この点を京都にも応用して、もう一度、京都の屋並みをきれいに再生する、見直しを図っていくのはどうかなと思います。

大倉 このディスカッションでは敢えてメインテーマを設定していないので、自由におっしゃってほしいのですが、沢井さん、京都の中心部で仕事をされていて、窓から見る景色を見て、西陣に限らず、京都の屋並みについてどう思われますか。

沢井 私は東山に生まれて、生家はいわゆる「鰐

の寝床」でした。今は中京のマンションの一室を事務所にしていまして、私自身も住んでいるのはマンションです。私の事務所の建物は建築時には問題になつたらしいです。三五〇坪の土地に一〇階建てで、日照権の問題など。隣は古風な黒瓦の屋根で私も対比が開きすぎるなと思いました。ただし、マンション自体は、法規上の理由でセットバックして植木が植えられていて中もきれいで快適なのですが、まわりとのコントラストを考えるとどうかなと思います。

大倉 京都の景観についての問題が典型的にでているのが西陣ですが、これを、先程脇田さんがおっしゃったように、一区画ごとに地権の再分配をしながら、建て替えていくのはどうでしょうか。

●木造を見直す

山崎 一挙に建て替えるのは現実的には困難です。少しづつでも本気で取り組んで欲しいと思います。今、京都の中心部は景観問題の他に、車の混雑、空気汚染、騒音への対策も遅れています。私自身も自分のこどもを京都の真ん中で育てる気にはならないほどです。低公害の車や、車をシャットアウトした通りを作ることも考えないと……。

景観を建都一二〇〇年のこの時期に考えることは歓迎します。ただ、京都がもうかなり以前から開発路線一本で来たことを思い返すべきでしょう。木造建築よりも、コンクリートのビルの建設を優先してきました。伝統建築地区でも、木造建築は外だけに留めて、内装はきちんとした近代的なものでないとダメだとときていますし、新町など京都の古い一郭でも、法律上、特殊建築物に分類さ



南禅寺の境内。疏水の分流が水道橋の中を流れています。

れると、木造ではいけないとしてきています。このように法律で規制してきて今になつて木造建築とは何を今更という気がしますが、私はここで反対に今だからこそ意味があると思います。一〇〇mのビルが問題になつていますが、今や、世界の高層建築は四〇〇mの時代です。高さで新しさを競うよりは、敢えて木造建築のよさに取り組むことに逆に京都の新しさがあると思えます。

私自身の体験から木造建築はすばらしいものを感じております。寺院の古い柱に打ち込まれた釘を抜くと、それが打ち込まれたときのままの輝きを保ち、木の匂いをさせているとき、そう実感しました。

脇田 私も木のよさは認めます。ただ神社仏閣と、京都の普通の町屋は分けて考えてほしいです。神社仏閣は絶対保存すべきですが、普通の町屋は、木も立派なものでないし、耐用年数も短い。だから古くなるとペンシルビルに立て替えられたりする。その辺が心配なのですが……

黒竹 私も“木”が好きで、新町百足屋町の町屋も文化一〇年の建築で、これは、寛永一四年の洛中洛外図屏風によると、豪商たちの住んだところらしいです。今、そこは改修されています。というのは、ペンシルビルを建てて減価償却などの経済性を考えると、どうも、町屋を古いままで改修して活かすほうがよいと思えたからです。これは町屋のデメリットをメリットにするひとつの例かと思います。具体的には先ず、シャッターやタイル類などからはじめました。改修の過程でも、古い壁のなかからより古い柱が補強に使われているの

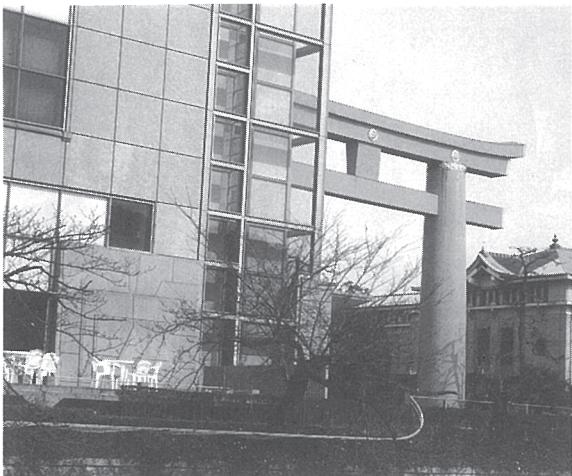
を見付けたときは、昔の人は木材を大事に再利用してきたのだと実感しました。こういう知恵は、景観作りの精神に有効なのではないでしょうか。今町屋を所有しておられるかたも、足元の利益にとらわれず、長いスパンで考えてほしいです。それから、現在、明倫校など、市内の廃校の再利用もどうにかして実現すべきでしょう。明倫校の歴史は京都の歴史のひとつなのですから。

大倉 沢井さん、黒竹さんの町屋の再利用の仕方を聞いて、先ほど、町屋よりマンションの方がよいとおっしゃっていましたが、もし町屋に住むことになつたらどうしますか。

沢井 私が住みたくないのは民家という意味で町屋という建築とは別です。一戸建の数寄屋作りに住めといわれたら、もちろん住みます。どんな町屋かによります。

大倉 ありがとうございました。最初に山崎さんから、京都の都心部はかなり以前から住めなくなつており、今は、開発から再生へ大転換しなおす時期という意見。脇田さんからは、一区画を一挙に再開発して職住を一体化させようとの意見。黒竹さんからは、木造のよさを見いだし、町屋を再利用している経験から一軒でも二軒でも再利用はできるという意見。沢井さんからは住空間・利便性を考えるとマンションの方が利用しやすいという体験でした。

ここで次のテーマに移らせていただきます。平安の時代から京都は多くの分野で最先端であり、時代時代の積み重ねがありましたが最近はそういうインプットがなく、中途半端になつてきている



岡崎公園の鳥居と国立京都近代美術館の新旧の対比。

ようです。その例として、御所と同志社と相国寺岡崎公園周辺の風景を紹介しました。

黒竹 今、北山通りに建築家のサンプルのような建物が建ち並んでおりますが、これに対し植物園の前に新しい通りを作るはどうでしょうか。

脇田 私は海外旅行をよくしていまして、北半球はほとんどめぐりました。そこでよく思うのは、京都の文化の蓄積度はたしかに素晴らしいのだが、少し自惚れすぎではないか、自己満足に陥ってはいないかということです。ヨーロッパの方により文化の歴史を感じました。このままでは、京都は奈良のようになってしまふでしょう。自惚れがす

ぎて前進する意志がなくなっているようです。
あと、京都の現状は、大所からみて、都市経済の活性化が大切で、小手先の処置だけでは混乱するだけではないかとも申しそえておきます。

大倉 沢井さんはどうですか。

沢井 人の意識がどうだったかなと考えます。よそから来た人が京都のどこを褒めるかというと大体、祇園、新橋か、北山通りのビル群でオシャレと言われます。古代人の感性を感じるとかではないようです。こういう両極端を京都人は受容できるわがままなところがあるようです。

黒竹 若い人は特に正反対のものを同等に高く評価していますね。「百足屋町」の店でも、わざと古いものを使って、それがナウいということになっています。古いものがフレッシュに受けとめられているようです。

脇田 ただ、この種のものは、希少価値と懐古趣味の域をでないかぎりにおいてしか意味をもたな

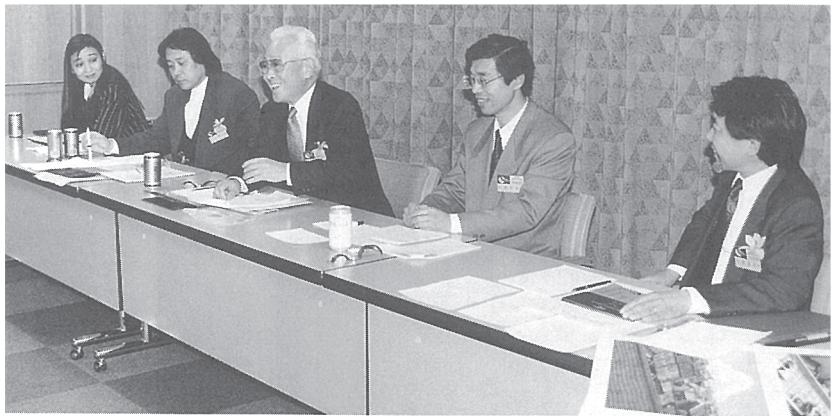
いものです。これに惑わされて、生活の実態から離れてはいけないでしょう。

黒竹 昔の鳥丸通りの洋館も珍しかつたから価値を認められたのであって、今の町屋もめずらしいから価値があるので。ただ、私はビジネス上でも、建都一二〇〇年の見えない価値を背景に感じる必要はあると思います。

脇田 昔には帰れません。室町通りは昔、土道で、馬車が糞をたれて通っていた。時代時代の流れのなかで考えるなら、昔のよさをもう一度というのはできません。屋根を例にとっても板屋根から瓦屋根・洋瓦と変わっている。



御所の北。今出川御門から、同志社を望む。
中央部、奥に見えるのは相国寺の正門。



山崎 懐古趣味も部分的にはよいと思います。時間を使いたいのでは、デザインを組み込むことも必要と考えています。亀井勝一郎の『大和古寺巡礼』のなかで、彼らは廃仏棄釈の影響で薬師寺の壊れた壁にまるで坊さんがわざと壊さないかぎり作れないような風情が醸し出されていました。京都のデザインの中には、嵐山のように、デザインされていないように見えて、実はデザインされたものがあります。日本では、風情は人が作りだしたもののようにです。話を現代の京都に戻しますと、京都は大いに欲張るべきだと思います。造形で見せる近代的な部分と雰囲気で見せる町屋などに分かれて存在しているでしょう。

もうひとつ、明治建築とその後の近代建築について述べますと、日本では、復古主義の頃の、悪く言えばマンネリの時代のデザインで、それが日本では革命的な変化だと感じられていました。この点は、逆に日本の桂離宮などを外国にもついて最も最終的には受け入れられるだろうと思いません。ただ、今は検証済のものだけでなく、検証済でないものを受け入れる必要があるでしょう。それから、ウイーンでは、おもしろいことに三・四階はバロック様式だが、一・二階は近代的な建物になっているのを見かけました。こういう使い分けもあります。ニュルンベルクでは、戦争で大部分廢墟になつて、町の形だけ残して、建物はまったく新しいものに変わっていました。どこでも新旧の対比ではなく、どこでも連続ではないといひ入れてはどうでしょうか。

山崎 時間をデザインに組み込むことも必要と考えています。亀井勝一郎の『大和古寺巡礼』のなかで、彼らは廃仏棄釈の影響で薬師寺の壊れた壁にまるで坊さんがわざと壊さないかぎり作れないような風情が醸し出されていました。京都のデザインの中には、嵐山のように、デザインされていないように見えて、実はデザインされたものがあります。日本では、風情は人が作りだしたもののようにです。話を現代の京都に戻しますと、京都は大いに欲張るべきだと思います。造形で見せる近代的な部分と雰囲気で見せる町屋などに分かれて存在しているでしょう。

もうひとつ、明治建築とその後の近代建築について述べますと、日本では、復古主義の頃の、悪く言えばマンネリの時代のデザインで、それが日本では革命的な変化だと感じられていました。この点は、逆に日本の桂離宮などを外国にもついて最も最終的には受け入れられるだろうと思いません。ただ、今は検証済のものだけでなく、検証済でないものを受け入れる必要があるでしょう。それから、ウイーンでは、おもしろいことに三・四階はバロック様式だが、一・二階は近代的な建物になっているのを見かけました。こういう使い分けもあります。ニュルンベルクでは、戦争で大部分廢墟になつて、町の形だけ残して、建物はまったく新しいものに変わっていました。どこでも新旧の対比ではなく、どこでも連続ではないといひ入れてはどうでしょうか。

脇田 山崎先生にお聞きしたいのですが、パリのデファンス、神戸のポートアイランド、千葉の幕張メッセについてどう思われますか。

山崎 学生時代に、ルコルビジェやブロイエルを見て大変がつかりしたことがあります。あまりにもつさく、規模も小さいし、腕も悪い。それに比べて古いものの方が、規模、技巧度なども格段によく思えたものでした。京都にしても、本願寺のような壮大なものが今の時代にできるでしょうか。ポストモダンの流れで装飾が復活していますが、これもよいことだと思います。装飾は本来よいものです。デファンスなどの無味乾燥な建築物はつまらないと思っている人は他にもいるでしょう。

●先を見通す眼を

大倉 黒竹さん、他の歴史都市に京都が参考にすべきものはどういったものがあるでしょう。

黒竹 倉敷が美観と経済を両立させているのは参考になります。秋田の角館（かくのだて）も、昔の町並みが過疎化して、結果的にそのまま残つて再生されています。醤油の醸造所など、昔の町がそのまま残つた兵庫の竜野の例もあります。これらは、規模が小さいために、経済活動と古い町並みを結びつけることができたとも考えられます。京都は広い分、困難だらうと思います。行政指導と法律を含めて考えていかねばならないですね。

それから、相続税制によって名義人の書き替えで土地を手放さざるをえないのもひとつの原因です。保存には税を軽減して、転売すると税がかかるような施策でもできないものかと思います。

脇田 単に町屋というだけでは、税制改革は無理

でしょうね。

黒竹 京都を国際都市と考えるなら、国家的措置も必要ではないでしょうか。住人の意識も、観光客・通行人の存在を射程に含めた意識を持つほしいです。

脇田 その辺のところが、今、「街づくり審議会」として田辺試案がでています。

黒竹 プロジェクトが必要ですね。一市民から参加できるよう。

脇田 ただ、ペンシルビルだけは早急に歯止めをかけないといけないです。

黒竹 それも長いスパンが必要ですよ。

大倉 では、次に、地区計画・建設協定についてお伺いしたいのですが……

山崎 先ず説明をしたいと思います。地区協定は地区住民全員、建設協定では約九割の住民の賛同で、都市計画の法規以外の厳しい規制ができる制度です。例えば「雑居ビルは禁止」と決めておけば、建設が開始されていても裁判で勝てるわけです。

脇田 これも、あまり無秩序に許可すると将来のグランドデザインの妨げになりますね。

沢井 私は、そういう問題以前の路上駐車など基本的な問題を解決できないかなと思います。歩きにくいし、危ない。京都の人は、歴史的・近代的・オシャレ・合理的と欲張ろうとするところはパリと似ているようですが、私は風情のようなものがかすかに雰囲気として漂っていればよいと思います。

脇田 パリは制限されているようですね。

山崎 制限というより、ヨーロッパは市が市街地

の六〇%から七〇%を所有して貸しているのが実態です。また、先ほど、法規上のこと、相続税のことがましたが、日本の税制は平等化がねらいだから、高くて当然なのだと、ある官僚に言われたことがあります。敢えて官僚に対抗して言えば、今のかかる税はヤクザのようなものです(笑)。たった、五〇坪の土地でさえ相続税が高く手放さなければならず、また、土地の高騰で買戻すこともできない。空き地にビルが建ち、木造家屋が高いビルに変わるのもしようがないですよ。その他、都市計画法では、風俗営業だと建蔽率四〇〇%で、辛うじて地区計画と建設協定でゲリラ的に対抗しているところです。

脇田 京都人は昔から口は出すけど金ださんでしたが、これからは貢献が必要ですな。

黒竹 是非出して下さい。

大倉 では、ここで広く、質問・ご意見を承ります。

坂本 (会場) 木の文化の見直しといいますが、これをよく考えてみると、わたしたちが学生の頃から木が好きだったかというと必ずしもそうではないでしょ。現在ペンシルビルのオーナーも昔だからこそビルを建てようと思ったのであって、今はそう思っていないかも知れません。今大事のは、市民に対する教育ではないでしょうか。今すぐ、効果を期待するのは無理、二〇年後には美しい街になつているかも知れません。

宮井 (会場) 原則的に脇田さんに賛成です。だがここで京都人が利己心を捨てて協力するだろう



かと不安です。また、京都は経済基盤が弱いですが、それでも京都のことは京都人の金でやってほしいです。

また、私は京都の街を汚いと考えていますので、美しくするためには中心部を全部つぶして古都に相応しい新しいデザインで再生させる必要があると思います。

ドイツでの経験から、私は京都人は京都を愛する「こころ」が足りない気がします。ドイツのブレーメンでは、空襲時、ラートハウス(市役所)を市民が総出で、布を掛けて守ったそうです。今の京都に市民が誇りを感じる建物があるでしょうか。ここが京都の根底にある問題ではないかと思います。

大倉 本質を突く問題提起でした。ではドイツで仕事をなさつておられた村林さん、何かございませんか。

村林(会場) 京都はもう手遅れ、ドイツはもつと長いスパンで、ものを大切にし、本質を引き出していく質実剛健な風土があります。

高野(会場) 私は和歌山から来ておりまして、京都に関しては何も言うことはございません。素晴らしいところとと思っております。

大倉 京都は、まだ捨てたものではないという意見でした。では、西陣の町並みの研究をなさつている北条さんお願いします。

北条(会場) 京都の景観についてはまだまだ基本的な土壤があります。ただ、現状認識を深めることは必要です。相続税など税制のため、アパートへ建て替えられること、西陣などの産業が衰退退

して経済基盤が弱くなっていること。古い町屋の老朽化が進んで、鉄骨安普請の家に建て替えられること、その他より緻密な認識が必要です。あと、植物園、御所など国公有地の利用もあります。

黒竹 百足屋町にいて感じることは鉢が町内で出せなくなっていることです。人数が足りない。百足屋町も夜は静かです。これで街の中かと思えるほどです。職住接近を考えなければいけません。百足屋町でも、今住んでいるのは四、五世帯ほど、他の町内ではもっと少ないところもあるようです。ですから、祭りのときだけ引っ越して出ていったものが帰ってくることがあるのです。祭りにはシンボリックなパワーがあるのですね。

山崎 京都もヨーロッパのように、公有地を増やしていく欲しいですね。その時は、國からお金借りてもよいと思うんです。そうすれば問題も解決すると思いますが……

大倉 では、滝さん、何かございませんか。

滝恵一(会場) 話を聞かせていただいて感じたことは、経済的に見ると悲観的だということです。西陣も職人が不要になつたり、最近しばんでいます。経済基盤作りが大事だと思います。

西口(会場) それぞれの街に独自の美しさがありますが、それを守るのは地域の方々が主人公にならなければならないと思います。そのためには、経済活動の活性化、充実が必要です。

大倉 では時間がきたようございます。まだ話しつり多い方も多いでしようが、これで第五分科会を終了させて頂きます。ありがとうございました。

第十二回 京都デザイン会議 御参加の皆様



●一般											
村林 俊治	奥藤 圭造	川勝 将弘	大久保 亨	渡辺 康人	速水実千子	斎藤 よしのり					
中浦 正音	津田 佳明	長谷部勝三	中村富二男	大谷 知子	伊藤 寿浩						
片桐 嘉正	三田 昌宏	吉田 精治	山口 晴司	滝 恵一	小椋 輝勝	今井 義園					
渡世 正巳	米田 健一	小西 光蔵	藤木 武久	藤井 行雄	熊谷 實						
●(社)日本図案家協会(日図)	團 武夫	西川 伸一	石井 豊彦	鈴木 秀和	清水 哲夫	石 庸行	木下 武彦				
浦壁千万路	河合 玲	上田 年子	五十嵐參子	森本 としろう	石田 紗江	佐口須磨子					
増井 淑子	岡山 順子	竹中 千鶴	林 勢津子								
●京都服飾デザイナー協会(KDK)											
村上欣美枝	平岡 隆一	吉田 知代	樽家 紀治	藤田 正毅	奈佐季臣子	磯村 静子					
玉岡美和子	田村晃一郎	田村 蓉子	森田 博子	山内 和子	谷 研一						
●(社)日本デザイン文化協会(NDK)											
石田 哲也	田内 隆司	絹川 雅則	松尾 安浩	澤田 明廣	野田 伸三	水口 義晴					
川勝 一範	谷口 秀二	清水 道雄									

●京都インテリア産業協会（KIS）

橋本奈良二 吉村 毅 野々村道信

大村

恒久

岩崎

智紀

岸本

康志

岸野

勝子

●（社）京都デザイン協会（KDA）

大橋 正 北川 清和 高木 唯可

奥藤

洋子

杉本

樹

久谷

政樹

本郷大田子

柴田 献一 真鍋 宗平 奈良 磐雄

恩地

惇

鳴

高宏

大和

文昭

沢井

敬子

米原 新二 茨木 善弘 尾崎 要

園部

正晴

佐々浪昌夫

宮井 欣二 竹村 昭彦 本郷千恵子 稲葉 洋幸

南澤

弘

太田

景子

森

勝久

植谷 貞雄 木村 学 石川 源二 黒竹 節人

●（協）京都クラフトセンター（KCC）

谷口 康男 清水 忠義 多田 親正 木下 郁夫 三輪 泰司

道家駿太郎

東郷

國泰

神島 和代 渡辺 千秋 宋 鞏澤

●京都建築設計監理協会（KSK）

沢村 徹 上田 博之 森木 保彦 永田 義博 橋本 繁美 田積 司朗

●（社）日本グラフィックデザイン協会（JAGDA）

川島 春雄 小川 幸雄 柏木桂三郎 渡邊 隆夫 板倉 瑛二 山口美津夫 鍛治谷房子

谷口 智子 高野 澄子 林 曜子

●（社）京都府造園建設業協会（造園）

津田 秀夫 寺石 隆一 佐野 晋一 高石 秀雄 加藤 嘉基 田中安太郎 山田 昌次

山下 勝 今西 信一 河原 靖尚 中村平八郎 玉井 肇 斎藤 正信 井上 剛宏

矢野 光一 小林 正佳

●（社）新日本建築家協会（JIA）

木川貴代司 北條 誠 中島喜代一 小西 啓雄 川口 成人 寺嶋 繁久 大倉 達也

吉本 武市 若城 光恆 西村征一郎 山下 良三 坂本 克也

●来賓・招待

（来賓） 京都府 商工部染織・工芸課長 辻本 泰弘 同係長 中村 美代子 同主任 中田 昭

博 京都府中小企業総合センター デザイン課長 小畠 剛 京都市 経済局商工部伝統産業課

長 井上 修一 京都商工会議所 商工振興部次長 中西 元

（招待） 京都市 都市景観課 高木 勝英 同 莢谷 勇 同 山口 恒夫 同 新喜 富雄



同 大塚 圭治 同 山口 博嗣 京都市住宅供給公社 事務局長 西口 光博 京都商工会議所
 商工振興部 萩野 達也 同 西川 実 中部デザイン団体協議会 副会長 宇賀 敏夫 同事
 務総長 小山 太郎 同理事 稲石 嘉郎 同事務局長 池田 高明 同代議員 加藤 完治 同
 副会長 山崎 勝二 同理事 中島 一 (財)国際デザイン交流協会 事業第二部長 山田 知
 子 関西電力(株)京都支店 福川 晃 西日本旅客鉄道(株) 地域開発本部開発課 加地 忠夫
 同 竹村 茂 同 安田 健一 (株)京都リビング新聞社 池田 三郎

●開催委員会

委員長 三輪 泰司 (KSK) 副委員長 本郷大田子 (KDA) 委員 団 武夫 (日岡)
 上田 年子 (KDK) 村上欣美枝 (NDK) 野田 伸三 (KDS) 橋本奈良二 (KIS)
 南澤 弘 (KCC) 川島 春雄 (ICC) 田積 司朗 (JAGDA) 山田 昌次 (造園)
 坂本 克也 (JIA) 特別委員 柴田 獻一

●実行委員会

委員長 久谷 政樹 (KDA) 副委員長 道家駿太郎 (KSK) 事務局長・涉外部 野田 伸
 三 (KDS) 財務局長 小川 幸雄 (ICC) 涉外部 水口 義春 (KDS) 満野 久 (K
 SK) 会場設営・広報部 永田 義博 (JAGDA) 森木 保彦 (JAGDA) 懇親部 稲
 葉 洋幸 (KCC) 沢井 敬子 (KDA) 森木 としろう (KDK) 本会議部 津田 秀夫
 (造園) 佐野晋一 (造園) 黒竹 節人 (KCC) 運営部 柏木桂三郎 (ICC) 樽家 紀
 治 (NDK) 石田 紗江 (KDK) 分科会部 木川貴代司 (JIA) 大倉 達也 (JIA)
 平岡 隆一 (NDK) 広報部 熊谷 實 (日岡) 片桐 嘉正 (日岡) 記録部 岸本 康志
 (KIS) 吉村 穀 (KIS)

後援

近畿通商産業局 京都府 京都市 京都商工会議所 西日本旅客鉄道(株) (財)建都一二〇〇年記
 念協会 (財)日本産業デザイン振興会 (財)国際デザイン交流協会 京都経済同友会 京都青年会
 議所 京都織商青年部 京都新聞社 朝日新聞社(支) 毎日新聞社(支) 読売新聞社(支) 産業経
 済新聞社(支) 日本経済新聞社(支) 共同通信社(支) 時事通信社(支) 京都リビング新聞社 N
 HK京都放送局 KBS京都

協賛

京都銀行 京都信用金庫 京都中央信用金庫 伏見信用金庫 京都共栄銀行 西陣信用金庫

第12回

京都デザイン会議・会議録

発行・平成四年三月三十一日

編集・京都デザイン会議実行委員会

エディション・アルシーヴ

撮影・(有)フォトスタジオ写洛

事務局

京都デザイン関連団体協議会へ京デ協

〒六〇五 京都市東山区祇園町北側二七五

A B L 三階・(社)京都デザイン協会内

T E L (075) 五四一〇二三九

F A X (075) 五二五一〇二九四

印刷製本・(株)創栄図書印刷

